

アモーレの鐘はもう聞こえない

「立ち止まるな、走れ！」

そう、言われて・・・また、走り出すことに決めた。

登場人物（三流劇団「ぼを・たんつ」の劇団員達）

茂木公一（もぎ・こういち 通商「もつくん」）

劇団旗揚げ当時から専任のモギリ（受付係）。その名前から「モギリのもつくん」と他の劇団員に揶揄されている。舞台経験がまるでないにもかかわらず、今回はひよんなことから主役で大抜擢される・・・

小松和人（こまつ・かずと）

当劇団の演出・脚本家。出たがりなので、役者もやつたりするが、その演技は常に賛否両論を巻き起こしている。豪気なように見えるが、以外と線が細い。ここが彼の可愛ところなのだが・・・可愛さだけで世間はわたって行けない。

田口昌（たぐち・あきら）

舞台監督をするために生まれてきた男。聞き分けのない劇団員どもをたずなを締め、ぼろぼろになりながらも、毎度毎度公演を成功させてきた。しかし今度ばかりはちょっと切れちゃったみたい・・・

三森信（みもり・まこと）

劇団一の性格俳優！というか、そうとしか形容出来ない。その演技の性質からか、女性ファンはきわめて少ない。木暮崎剣とともに二枚看板としてこの劇団を背負ってきたと信じているという自信家の側面も合わせ持つ。

藤原時起夫（ふじわら・ときお）

劇団の中では一番の新参者の某私立大学生。演技はいまいちだが、親父は大金持ちだ。去年のクリスマスプレゼントはなんと「黄色のカマロ」だったという噂だ。まったく以て、羨ましい限りだ・・・

小埜咲智（おの・さち）

子役と呼ばれる女優。歳はくつてるんだろうが、いかんせん小学生っぽく見えるのが強みでもあり弱点でもある。生活費を稼ぐために「夜のお仕事」をしようと試みたが、雇主にやんわりと断られたという悲しい歴史を持つ。

吉田吉広（よしだ・よしひろ）

年齢三十を大きく越え、未だなお三流劇団の役者なんぞをやっている。彼のボケ気味の脳味噌の中には、大人の思慮深さと子供の聞き分けのなさが共存しているようだ。人生全般にわたる彼自身の「突っ込みの甘さ」が、周りの人々をヤキモキさせる。キヤサリン大塚（きやさりん・おおつか）

突然嵐のように現れる客演女優。舞台の上でも日常生活においても、異常にテンションが高いので、一緒にいると愉快だが厄介でもある。あの大人気だった女の子劇団「ワシナイトシンデレラ」に所属していたというスゲー過去を持っている。

西村加奈（にしむら・かな）

一ヶ月ほど前に退団した元看板女優。劇団にいたころは、「芝居はどうあれ、加奈だけを見に来る」観客が星の数もいたという。そのアットー的な存在感は、公演中いつも劇場を埋め尽くしていた加奈宛の花束の数からも想像出来た。

木暮崎剣（ぐれざき・けん）

言わずと知れた、看板男優。おつむは弱い、舞台じゃ光る。「お山の大将、裸の王様・・・呼びたきや、好きに呼ぶがいい！俺は劇団一の暴れん坊よお！」今回も彼のわがままで、この木の葉の船のような劇団に大騒動が持ち上がるわけだ！

オーブニングは「とつぽつほ」

豊島区南池袋二丁目、池袋シアターグリーン。

客席は毎度のごとく脳天気なOLや学生達の騒ぎ声で溢れている。

まるでオイルサーデインの缶の中だ！ 皆ひつ付き合つて…ご苦労なことだ。

薄暗い客電、淀んだ空気…

炭酸の抜けきったジンフィズみたいな客入れの音楽がだらだら垂れ流しにされている中、当然のようにスピーカーからアナウンスが告げられる。

「本日はお忙しい中、演劇レーベル Bo-tanz の第八回公演『アモーレの鐘はもう聞こえない』にお越しいただき、まことにありがとうございます。暑苦しいほどのドラマを汗と涙と唾液とともにお届けする私どものけつたいな『お芝居』に毎度毎度こりずにご来場下さいますお客様にこの場を借りて感謝いたします。今回の公演でも、役者、スタッフ一同、命をかけて「もうたくさんだ！」と、悲鳴が上がるほどの『感動』をお贈り出来ればと考えております。」

客電はもうすでに消えかけている…

「…なお、本日お渡しいたしましたパンフレット及び公演チラシに若干の変更がございます…諸般の事情により、まことに勝手ではございますが、今回の演目『アモーレの鐘はもう聞こえない』を当 Bo-tanz が一九九一年に公演し好評を博しました『臨界／東仲町商店街定在波』に変更させていただきます。この作品は…」

唐突に、轟音のようなオーケストラ・ヒットとともに一本のサスが舞台を貫く！ 地下倉庫のようなコンクリート打ちっぱなしの小部屋に顔面蒼白の男がひとり、脚本家、小松である。

小さなテーブル、デスクライト、そして古式ゆかしい黒電話機。ワードプロセッサのCRTからの淡い光が彼の顔を照らしている。

小松

…夢か？ うーわー、ひでえ夢見ちゃったな… 何が「若干の変更」だよ。まったく…脚本は九分九厘出来てんだよ！ …嘘だけど… そうだよ、そうだよ、このボンクラ頭からはもう何の言葉も出てきやしねーんだ…あーっ、遠くへ行きたい…何処か遠くのうらぶれた漁村で、ゆつくりとした時の流れに身を任せてひがな一日蜆貝を取るのさ…いや、弱音を吐いちや行けん！ プラス思考だ、プラス思考！ 全てを楽観的に考えるんだ！ それで巨人軍だつて日本一になったんだから… 楽に行け、楽に行くん！ 頑張れ！ 頑張れ、俺…（勢い込んでワープロに向かうが）…とは言うものの…こればかりはな…とつぽつぽつほ…

電話が鳴る。

小松

はい、小松です。ごめんなさい…でもあたしは今外出中なの…ピーッという発信音が鳴ったら御用件を仰しやつてください。折り返しこちらから…

舞台脇に男が現れる―舞台監督の田口昌である。受話器を握り締めた手に血管が浮き上がっているが、その声は平穩そのものである。…しかし彼の名前―漢字で書くとき真四角のみで構成される名前―はちよつと変だぞ！

田口

…馬鹿か？ お前は。その部屋にあるのは黒電話だろう。留守電機能なんか付いてねーだろうが…

小松

はつはつはつ、愚かな… その黒電話の回線になんとお、豪華ファクス付き留守番電話オタクスを繋いでおいたのさ。それもおまえの知らんうちにな…って言いながら受け答えしてる私はなんなんでしょうか？

田口 ……ただの馬鹿なんじゃねえか？

小松 冷静に受け答える奴だな、おまえは…

田口 で、上がったか、脚本？

小松 ……おまえさ、舞台監督だからつてよ、年頃のがき持ったお袋みてーに、ちまちま探り入れるんじゃねえよ。期限は一週間後つて言っただろ？ ……それまで、黙つて待つてりゃいいだろが…

田口 ……だから、今日がその一週間後なんだよ。

小松 ……ちよつと待て！ 今、お前の口からなんの緊張感も無くほとぼしり出た言葉

田口 葉を、べつぐ・ゆあ・ばーどんだ！

田口 だから、今日がその期限だ…

小松 なんだつて！？ 田口、今、平成何年何月何日何時何分何秒よ？

田口 ……平成七年一月六日（腕時計を見て）午前十時四十八分三十二秒。

小松 冷静に受け答えるなよ、おまえは！

田口 因みに、本番までなんと！ 一週間！

小松 げつ、じゃあ、おれは…丸七日間、何もしないでぼけーつとしてたつてこと？

田口 ……何もしないで？

小松 こつ、言葉のアヤだよ…馬鹿だな！ 本はよ…出来てんだよ…九分九厘まで…（嘘だけど…）

田口 九分九厘？

小松 そー、そー、ほとんど仕上がったも当然よ！

田口 ……千里の道を行くものは、その九百九十九点九厘を半ばとせよ。お前の場合、特にな…

小松 分かつてらつしやる…さすが舞台監督！

田口 とにかく今日の夕方、劇団員が練習場に集まる…その時まではラストシーンが決定していることを期待しているよ…小松先生、がんばつてね。（電話を切ろうとする）

小松 暫し待たれい！ 田口氏。…おりやさ…年末年始棒に振つて頑張つたわけよ。

紅白歌合戦も新春かくし芸大会も見ないでさ…その辺り加味してもらいたいのよ… 頑張り賞欲しいわけよ…

田口 俺は結果でしか判断しない…

小松 ……みかけ通りにドライなお方。…それも、こんな地下室みてーな小部屋に閉じ込められてさあ…出る知恵も出ねえつて言うの。

田口 ……あのなあ、小松つつあん。その地下室みてーな小部屋に閉じ込めろつて仰しやつたのは、当のあんたでしようが？ 「事態は殊の外、切迫している。俺をこのアトリエの小部屋に閉じ込めてくれ！」つて、言っただろ。

小松 そつ、そうでしたっけ？

田口 すつとぼけてんじやないの…俺をつなぎ止めてくれ、そうしないと、また脚本も書かずに、富士急ハイランドだの、りんどう湖ファミリー牧場だのに遊びに行つちやうだろうから… いいか、俺を俗世間から隔離するんだ。外から鍵をかけ、鎖でがんにがらめに封鎖しろ！ 引田テンコウでも脱出不可能ならいにな…

小松 「…それから、七日分の食料とハイライト五カートンも忘れずにな…用意する食料は近くのローソンで仕入れよう。一樣このメモ用紙に記載しておいた…」

田口 「…乾パン、鯖の水煮、ボルビック？ 六甲の美味しい水じやだめか？」

小松 「だめだ！ ボルビックだ！ 俺の定番だ！」

田口 「ホントか？」

小松 「嘘だ！ 初めて飲む…」

田口 「こしひかり一〇〇パーセント農協ご飯、丸美屋セーラームーンふりかけ」

小松 「…すまん、趣味だ。」

田口 「それに…マルちゃんホットヌードル全種類？」

小松 「ただ、食べてみたいだけだ…いいだろう？」

田口 「いいだろう。で、小松。金…」

小松 「へっ。」

田口 「金だよ、金！」

小松 「劇団の経費で落としてくれ」

田口 「だめだ！」

小松 「・・・落としてくれ、おれ、金無い。」

田口 「この年の瀬にか？」

小松 「（小刻みに頷く）」

田口 「自分のさいふを取りだし、覗く」・・・俺が立て替えておく。」

小松 「さんきいうー、まい・べすと・ふれんど！ それから老婆心ながら忠告してお

くが・・・」

田口 「なんだ？」

小松 「レシートはすぐ捨てるように・・・（一応、これが《落ち》）」

田口 「・・・思い出したか？」

小松 もう、ばつちり。

田口 おまえにや、貸しがある。・・・てなわけで、宜しく頼んだぞ。夕方までは、まだ

六時間もある。じゃあな・・・（切ろうとする）

小松 ちよつ、ちよつと待つてよ。ここ出してくれよ！ 頼む、息が詰まりそうなんだ・・・

田口 ああ、出してやるとも、六時間後にな・・・

小松 あんたそんな風に簡単に言うけどさ。いろいろと大変なわけじゃん・・・

田口 ああ、そうだそうだ・・・加奈のかわりの客演からやつとこさOK貰ってさ・・・

もう脚本の方は渡してあるし、台詞ばつちり入れて今夜から練習に来ること

になつて。・・・名前は・・・んと、「何とか大塚」って・・・

小松 何とか大塚？

田口 エミリーだか、エリザベスだか、ジンバブエだか・・・そんな感じだ。

小松 ジンバブエ大塚・・・ばわふおーな名前だな・・・

田口 そんなわけだから、心置きなくラストまで突き進んでくれ。じゃあな・・・（切

ろうとする）

小松

田口

小松

そう、そう、言うの忘れてた・・・俺、ワープロ打つてて指骨折しちゃつてさ・・・
じゃあ、足の指で打て・・・（切る）

だから、ほら、あのさ・・・ツーツーツーだつて・・・（受話器を下ろす） あーあ、
どうすつかな・・・「私の石の子宮はもう言葉を生み出せない」ー倉橋由美
子なんてな・・・（ポケットから、包みを取り出すーそれは何重にも布で巻かれ
た腕時計であるーそれを解きながら）ほんと知らねーうちに年明けちゃうん
だからなー。時間つていうのは、嚴重に梱包しても流れでてきちやうものみたい
よね・・・（文字盤をのぞき込んで）・・・もう十一時か・・・（立上り、小窓のカ
ーテンを開けるー眩しそうだが今頃、長野県的美ヶ原高原美術館じゃ、今年も
アモーレの鐘が午前十一時をお知らせしてるのだろうか・・・

「アモーレの鐘」の音が響きわたる。舞台はゆっくりと暗転して行く。鐘の音に、
ベースギターの小粋なフレーズが絡まつてくる。そしてバスドラムがそれに呼応
する。神経に障る金属的なギターのカッティングとともに小部屋の壁が左右に
分かれ、強烈なバックサスに縁取られたライブバンドが出現する。メイソント
ル「アモーレの鐘はもう聞こえない」だ！

アモーレの鐘はもう聞こえない

目覚まし代わりの鐘の音

いつも決まった調子でがなる

ブラウン管から垂れ流されてる

秒単位で切り替わる現実という虚構

そして、都市は自由落下の速度で進行する

昨日と同じ、明日も同じ

「それでも、それでも、向こうでも……アモーレの鐘」

張り付きつばなしの凍った笑顔

借り物の言葉、口から漏れてる

機械的なチャイムで動く

通勤電車と群衆の流体力学

そして、その男はセルロイドの手で吊革を握る

昨日と同じ、明日も同じ

街中のスピーカーから……アモーレの鐘、

手前自身の足元を見な

走つて来た曲がりくねった道を振り返りな

石灰の白いスタートラインが現れて……

湿った感触が指の先から脳天へと駆け抜けて行くだろう？

用意はいいか？ そろそろピストルが鳴る……

アモーレの鐘はもう聞こえない

きつと、アモーレの鐘はもう聞こえない……

唐突に、暗転！

もつくんの朝(昼)

サスペンションライトの中に一人の男―茂木公一(モギリのもつくん)が立っている。ライブバンドはストップモーション。茂木は鏡を見ながら鼻毛を抜いているようだ……

茂木

……真夜中に道路工事の警備員のバイト、いつも三時ぐらいには上がれる。昨日なんか……あつ、今日か？……午前二時に上がれちゃった。それでも八時間労働と変わらない給料が来るんだから……美味しいバイトだよな。そもそもって、原チャリで帰って即寝る。起きるのは午前十一時。何時に寝ようがこれだけは決まってる。年が開けても相変わらずテレビから流れる「アモーレの鐘」が目覚まし代わりだ。美ヶ原高原美術館に原爆が落ちるか、フジテレビが倒産しない限りは、この生活は変わらないだろう。顔を洗い、歯を磨く……今朝は(もうすぐ昼だけど……)、興に乗って鼻毛も抜いてみたいですっ(一気に鼻毛を抜く)……痛つてーなー、三本も一気に抜けちゃったよ(図らずも涙目になっているもつくん)……。何でばく、こんなに鼻毛伸びるの速いんだろうか？ いや、こうなつたのつて、東京来てからだだよ？ 田舎いたころは抜いたことなんかなかったもんな……やつぱりここは空気が汚れてるつてことだな、これは……センシティブな僕の鼻毛がこの腐り切った街の空気に敏感に反応したというわけだ！(はつと、気付いて) そうだよ！《敏感鼻毛》だ！ほら？よく「あたしつて《敏感肌》だから……」言うじゃない？それと同じ調子で、例えば三森さんとかに「もつくん、おめー鼻毛出てるぞ」つて突っ込まれた時、「僕は、ほら、《敏感鼻毛》だから……」つて切り返せば、「そうか……《敏感鼻毛》じゃ仕方ねーよな……」つてことになるよね？……なんないよね、普通……(ゲンナリしながらも、また鼻毛を抜く) うわつ、ホント痛てーよな……涙で前が見えまっせんつてな感じ。こんな具合じゃ、抜き終わるまでに涙腺空になっちゃうよ……(ふと、時計を見て)……もうこんな時間か。劇団の練習まであと正味六時間つて

とこか……台詞憶えなきやなあ、台詞……(こそこそと、束ねたしわくちやの紙屑のようなものを引きずり出す―台本である)……ちよつとぐらいは覚えとかないと、また田口さん怒つちやうからな……それに今日は小松さんがラストシーン引つ提げて地下室から出てくるつて噂だしな……(ばらばらページをめくり、おもむろに読み始める。だが、いかんせん、棒読みに限りなく近い)「……明転すると男が立っている―カッコ、不敵に笑いながら、カッコ閉じ―どうやら俺も年貢の納め時つてわけか……年貢と言つても庄屋さんに持つてくわけじゃないけどね……」(額に手をやり、考え込んだじやう、もつくん)「ニシンの酔漬けと非線型方程式がおいらの脳髓のなかでコン、コン……んっ？ コン・グ・ロ・マリットしたみたいな夜明けだぜ。東の空を焦がす朝焼けがまるで、マン、マンデ……マンデルブロの……」あーっ、もう、なんで小松さんの書く文は、こんなにカタカナ多いんだろう？ 覚えられるわけないよ……何であん時、「出来ません！」つて言えなかったんだろ？ あの剣さんが劇団辞めるつて言い出したとき……

サスが消え、ライブバンドに照明が振り替わる。リードヴォーカルをとつていた木暮崎剣がおもむろに口を開く……

木暮崎 ……おれさ、この際みんなに言つときたいことがあるんだけど……

田口 ……なんだ、剣？

木暮崎 ……止めねえか、今度の芝居。

藤原 ……なに言い出すんですか？ やぶからぼうに……

木暮崎 公演の日程はどんどん近付いてきてんのに、小松は本仕上がんねーし、加奈は辞めちゃうし……これじゃ、いいもんなかなか出来やしねーよ。

田口 あなの、加奈の代役は見当付いてるし、本だつてもうすぐ仕上がる。なつ、小松。

小松 目下、奮闘努力中でございます……

木暮崎 何が努力中だ！ ほんととは書けねーんじやねーのか、小松さんよ？

小松 書くつて言つてるだろが！ てめえの劇団の演出家を信じられねーつていうのか、おまえは？

木暮崎 演出家？ 本書くの到手一杯で、今回演出なんざひとつも付けてねーだろ、お前は！

小松 ぎくつ。

吉田 小松になんてこと言うんだ、剣。

木暮崎 とにかく、中止だ！ 中止！ こんなだせーメインテーマの練習も今日で終わりにしようぜ……

三森 剣、何があつたか知らねーけど……あんたこの劇団の看板男優なんだからさ。看板つて言えば、選手会長みたいなもんよ……そんなあんたがそんなこと言つてどうすんのよ。

木暮崎 三森ちゃん、その選手会長、お前に譲る……

三森 譲るつて？

藤原 まさか、剣さん？

木暮崎 そう、そのまさかだ。俺、今日限りでこゝ辞めるから……

小埜 辞める？

木暮崎 すまんな映智、君と分かれるのは辛いが……しょうがないんだ、こればつかは。

田口 血迷つたか、剣！

木暮崎 血迷つてなぞおりませぬよ。

小松 ……分かつた、こいつ。加奈が辞めたのを「カッコいい」つて勘違いして、お前も真似しちゃおうつて訳だな？ いいか、剣……それは誰かさんの持つてゐるつまねーもんが、どうしても欲しくなつちやうつていう小学生の論理と同じ事なんだぞ。

田口 剣よ、辞めてどうなるつてことじゃねえだろ。

木暮崎 ……実はつすね、俺、引拔きの声がかかつてんですよ。とある劇団の演出家がどうしてもつて……

田口 何処のタコ劇団だ？

木暮崎 ……日暮里キッズカムパニイ！

小埜 えーっ、日暮里キッズカムパニイ！

木暮崎 そう。

小埜 日暮里キッズカムパニイって、あのどヘデなロックンロールミュージカルやって、女子校生とかOLとか、何故か看護婦さんとかに絶大な人気を持つていう、あの？

木暮崎 そうだ。すちわーですのおねいさん方にも絶大な人気を誇るあの日暮里キッズカムパニイだ！

田口 おまえ、何処でそんなコネを？

木暮崎 へっっ、それは内緒…

藤・三 いいなあ…

田口 いいなあじゃねえだろ！ なあ、剣…お前が日暮里キッズカムパニイに行くのを俺は止めるわけじゃない…けど、それはこの芝居が終わつてからにしねえか？

木暮崎 それじゃあ、なんか、俺の気持ちの整理がつかないっていうか…

小松 はっはっは、じっにお前らしいぜ… 逃げ道ちゃんと確保してから逃げるところがな…

木暮崎 そうだ！ 私は常に予防線を張り、足場を固めてから歩き出すしつかり者だ！

小松 俺はそんな堅実な奴が大っ嫌いだ！ 早く消えちまえ！

藤原 小松さん、そんなこと言っちゃ…

木暮崎 ……小松さんは、さすがに物わかりがいい。じゃあな…

田口 ちよと待て、剣！

木暮崎 ……あつ、そうだ！ ひとつ聞くのを忘れてたぜ… 俺が辞めたら、劇団解散するんだろ？

小松 解散？ 冗談じゃねえ！

木暮崎 看板が抜けても、平気って訳か？

小松 当たり前ーだ！ なあ、田口？

田口 ああつ…そうだ。看板のかわりなんか掃いて捨てるほどではないが、いるにはいる。

小松 田口！ お前はなんて自信なげに言うんだ、こんな時に！

田口 ……今度の公演だつて、お前なしで成功させてやる！

木暮崎 俺の代役は？

田口 そりゃ、おめー…新看板男優…（背後から三森、自慢げに歩み出てくる）

もっくんよ！

…ける三森、ざわつく一同。もっくんはきよんとしている。

三森 ……田口つあん！ 何で俺でないの？

田口 お前もう役ふられてるだろう。

三森 でもキャストふり変えればいいじゃん？

藤原 そうそう、だつてもっくん、舞台立つたことないんだよ。モギリのもっくんなんだよ。

田口 しょうがねえだろ…もっくんしかいないんだから！

小松 剣！ おめーのかわりなんざ、もっくんじゃぶんおつりがくらー！

木暮崎 そうですか…これで私も安心して去ることが出来そうですよ…じゃあ、皆さん、さようなら（去ろうとする）

茂木 （もじもじしているが）…剣さん！ 剣さんがいないと…

木暮崎 ……きみだけだね、俺の重要性を理解しているのは…

茂木 みんな、分かってますよ…剣さんがいないと…

田口 いいんだよ、もっくん… 剣の代役やつてくれるよな？

茂木 でも…

田口 お前しかいないんだよ！

茂木 ……でも

田口 ……でも

田口 茂木！

茂木 (まわりを見回しているが、しやうがなく) はい……

木暮崎 そういうわけで…… 皆さん、お元気で…… 咲智！ 遠く離れても、俺たちは

同じ芝居の星を見続けていこうぜ…… (去る)

小埜 ホントに行っちゃった…… あーあ、私にやさしくしてくれるの、剣さんだけだったんだけどな……

三森 悪かったな、小僧。

小松 いなくなりやいいんだよ、あんな馬鹿！ せいせいしたぜ！

吉田 やめろよ、小松。……まったく売り言葉に買い言葉なんだからな、お前達は……で、田口どうする？

田口 今夜、剣に電話してみるよ。どう思う、吉田さん？

吉田 こんどばかりはな…… 奴は気弱な奴だが、後ろだてが付くと俄然強くなるからな……

田口 れーせーに心理分析してるときじゃないでしょ……

吉田 まー、俺からも連絡してみるけど……だめだったときは……(もっくんの肩に手を置く)

三・藤 ほんとにもっくん？

吉田 もっくんしかいないだろ…… なっ？

茂木 (つくり頷く)

田口 さつ、ぼさつとしてねーで片付けようぜ！……さくさくやらねーと、また終電のがしちまうぞ……

皆、楽器を片付け始めるが、もっくんだけ放心したように突っ立っている。照明が、再び茂木の単サスへとクロスフェードする。

茂木 ……なんであの時、頷いちゃったんだろう？ ぼくは、モギリのもっくんなのに…… そんなぼくが……なんでぼくが剣さんの代わりになるわけ？ 舞台に

一度も立ったことないのに突然主役なわけ？ こんなに下手クソなのに……なにが「お前しかいない！」だよ。藤原君使えば言いのに…… 藤原君やる気だったし…… 田口さん、勘弁してくださいよ…… 勘弁してくれないだろうけど……なんであん時「出来ません！」って言えなかったんだろ？ ……いけない性格だからだよ、ぼく自身が…… あーあ、(台本を見て)だから、台詞入れなきや……やっぱりだめだ！ いや！ 台詞！…… (しばらく、ダブルバインド状態で空回りしているが、はたと止まり、虚空を見つめ、そしてぼつりと)…… やっぱり、チケット切つてるのが性に合ってるよな……

ゆつくりと暗転……

キヤサリン大塚、出現せり

明転。

小松、ワープロに向かって……爆発的にキーを叩いている。まるで神が乗り移ったかのようだ。目が異様に輝いている。

小松

……どうしたというんだ？　まるで何かが乗り移りでもしたかのように輝く水晶の言葉が溢れ出して……脳髓の中で鏡のような水面を銀色の高速艇が波風もたてず、ストーリーの軌跡を描く……ドラマという名の十世紀も前に朽ち果てた楼閣が、逆回しのフィルムでも見るように、構築されて行く……そう言えば、聞いたことがある……　天才はその脳髓の一部に《大いなる者》に繋がるチャネルを持つという。……これが……これが神の見えざる手なのか？　自由競争の需要と供給が先物取り引きでゲームシヤフトなのか？……なんて、わけわかんないこと言ってるんじゃない！　（キーを叩く速度が一段と速くなる）……言葉が止まらない……こいつは、なにかとつもないことが……とつもないドラマが出来上がりそうだぜえ！　（……と、唐突に手を止め）　止めた、疲れた……　神が乗り移った真似だけしたって、本が出来るわけじゃなし……それに（CRTをのぞき込み）、あーあ、変な記号ばつかに、十二ページ半に渡って打ち込んだじゃったしな……しょうがねーことしちゃったな……まっ、取り敢えずデリートな。（と、デリートボタンを押そうとするが、止め）……ちよつと待てよ。これこのまま、みんなに見せて「……いや、苦労した甲斐あって、自分でも信じられないくらい良い作品に仕上がりました……」って、はにかみがちに笑ったら、奴ら俺を適切な施設に入院させてくれねーかな？　そうすりゃ、この長い地獄も終わる……んなわきゃ、ねーよな。「小松、おめー、ふりのなげーギャグかますんじゃねー」って言うが速いか、複数の鉄拳が俺のみぞおちにつき刺さってくるんだろーな、きつと。これは危険な賭だよ、リスク、ラージだよ。やっぱデリートだよな……でりーとお！　（と、デリートボタンを結局押す……だったら、

はなつから押せ！）……無駄使いた時間が消えて行く……　ああ、まるで私の作品が消えて行くようございますよ。……そして、わたしの意識も段々遠のいて行くのございました……なんてなつ。でも、てめえの人生もこうやって、ボタン一個で消せりゃあいいのにな……やな思ひ出とかよ……　こうやって缶詰にされてる辛さとか、今回の公演のきつい日程を決めたときのおごりとか……いや、もつと前の、劇団なんかやる羽目になった気の迷いとか、自分自身の誕生そのものとか……　つと、やばい！　マイナス思考になつてるぜ。だめだ、だめだ、明るい未来を見なくては……と言つてもあるのは、切ただが……頑張れ、小松！　明るい未来だ！　しかし、そこには切があるというの？　なんじゃそりゃ！　つて、でも切！　じゃあ、明るい切があるというの？　なんじゃそりゃ！　つて、独り遊びは悲しいですーなんて打つて、また消したりして……そうだ、独りぼつちだから陰々滅々となるんだ！　分かった！　その通り！……誰かに電話をしよう。外へるのは不可能だが、電話で人と話すことは可能だ！　話してるうちに何か妙案も浮かぶつもんよ。そうと決まりや、善は急げよ……　三森にでも電話しよう（ダイヤルを回す）……あつ、三森か？　小松だけだよ、おもしろい話が……げつ！　留守電だ！……しょうがねーな、じゃあ吉田のオヤジにつと（ダイヤルを回す）……でつ、でねえ……　じゃあ、藤原ちゃんに（ダイヤルを回す）……でつ、でねえ……　もう、田口でいいや、奴なら絶対居る（ダイヤルを回す）田口、出てくれ！　小松っあん、絶体絶命の危機つてやつなの……何故出ねえ！　（慌てふためき、アドレス帳をめくり）……もつ、もつ、んの電話番号は……（はたと手を止め）……ちよつと待て、こりやおかしいぞ！　絶対おかしい……　四人連続で出ないなんて　落ち着いて考えてみる！　仮に一人が電話に出ない確立を二分の一としよう。今、四人とも出なかったのだから、その確立は…… $\frac{1}{2} \times \frac{1}{2} \times \frac{1}{2} \times \frac{1}{2}$ ……どうやら、こいつは天文学的数字になりそうだぜ！　（……違います。答は $\frac{1}{16}$ です。）……確率的に言つて、こんなこと起こるはずはねえよな……世界が滅亡でもしてねえ限りは、はつはつ……滅亡？　まさか？　そんな馬鹿なことが……

舞台は、その様相をゆつくりと転じて行く。薄暗く、そして 物悲しくも、おどろおどろしく……

遠くから女の歌う賛美歌・コラールが聞こえ始める。

小松

……そうだよ。俺は一週間、この地下の小部屋に閉じ込められていた……その時地上では、何か危険な疫病のようなものが広まっていたのかも知れない……劇症溶連菌、狂牛病プリオン、空気感染型エイズ、またはインキンタムシ……熊手で蜆貝をかき寄せるがごとく、人々の生命を奪い去ったのだ。あるいは、惑星シリウスの超新星爆発！ 宇宙から有害な電磁波が降り注ぎ、一瞬のうちに地表面の生きとし生けるもの全てを焼き尽くしてしまったのか？ さっきの田口からの電話！……あれが俺の聞くことができた最後の人間の言葉となるのか？ もしかしたら、恐怖の大王という説もあるぞ！ ちよと待て、あれは一九九九年か？

気づくと、舞台後方に女が立っている。いかにものドレスを羽織り（これちや、恥ずかしくて電車にや乗れないよな）、サスのなかにチャッカリ入り込んで、美しいソプラノで歌っていらつしやる。この方があのキャサリン大塚である。

大塚

（歌うのを止め）……幽閉されし、ヘルダーリン……

小松

へっ、だーりん？ 奥様は魔女か、おまえは？

大塚

惜しい！

小松

惜しい？……するとやはり、世界の終焉に現れるという七人の御使いだな？

大塚

みつかい？ なんだそれ？

小松

黙示録の……

大塚

小西六？

小松

何を言ってるんだ！ いったい誰なんだ、貴様？

大塚

わたしは……わたしは五島勉！（間髪いれずに）うそだー！……すまん、すまん、世界の終末とかいうとこの名前しか思い浮かばんでの……しかし、気に入った！

小松

……気に入った？

大塚

そう、気に入った！ 音響ストップ！

大塚、手に持ったリモコンを舞台脇に向けスイッチを押す。音響ピタリと止み、照明も何事もなかったように元に戻る。

大塚

荒削りながらも、ストーリーテリングの基本はしっかり押さえている。のっけから世界の終末だもんな。それも原因は正体不明の病原体ときた！ こいつは、SFバイオハザードもんだね？ よくある話だけどね……

小松

けなしてんのか？

大塚

誉めてんのよ。あのシリウス爆発てーのでもいいわよね…… 焼けただれた大地の上で、死に忘れた男と女が…… んー、文学の香りがぶんぶんしてくるわね。

小松

そうか？

大塚

それに入り口もサイコーね。あのたった四人に電話が通じなかっただけで、世界滅亡に入るくんだり。不自然この上無いって感じ！

小松

やっぱり、けなしてるんじゃないか！

大塚

（大マジで）……ばかだね、あんた。舞台の上つてーのはさ、一般民間人が日々生活している判で押したような現実とはフェイズが違うんだよ、フェイズが！ 不自然でありや不自然であるほど、リアリティが増してくるもんなんだよ！ こんなちゃんまいことをこんなに大きく、しかも自信ありげに言う。それがやがて、感動的なドラマツルギーへと上りつめる原動力になって行くのよ！

小松

（うなづいて）……迫力に押されただけかもしれないが、一応、そのとおりと言っておこう。

大塚

さすが、分かてるじゃん！ はっはっはっは……

小松 はっはっはっは……(肩を叩き合い笑う二人、小松、笑うのを止め)……ところで、おまえ誰？

大塚 はっはっは……はあ？

小松 突然飛び出て、講釈たれて……おまえ、自称演劇評論家とのたまう社会不適合者か？

大塚 違う！

小松 じゃあ、なんだ？

大塚 見て分らないの？ あたしは、女優よ。

小松 じょゆう？ 漢字でどう書くんだ？

大塚 女優って言ったら、演ずる女だろ！ 他にどういう解釈があるつちゅーねん？

小松 ああ、女優ね。わりー、わりー。突然のことだったんで基本単語がイメージと繋がらなくてさ……そうか、分かった！ あんた、田口の言ってた客演の……

大塚 そう、その客演の……

小松 ジンバブエ大塚！

大塚 どう転べば、そこまでボケれるんじやい、われ！

小松 やつ、だって田口がそう言ってたんだもん……

大塚 いいかい、耳の穴かっぼじつてよく聞きな！ あたしの名前は、キャサリン大塚！

小松 なんだ、雰囲気一緒じゃん……

大塚 どこが！ あたしや、名前間違われるのが塩辛の次に嫌いなんだよ！ そんなあんたに、あたしのミラクルパンチをお見舞いしてやるぜ！ これでうちの劇団の女優が三カ月歯医者に通う事になったって言ういわく付きのヤツだ！ 覚悟しな！ ミラクル・パンチ……！

大塚、殴りかかる。小松、先ほどより何か考えごとをしている様子。危ない、小松！ パンチがあんたの顔面に炸裂するぜ！——という刹那、小松が苦もなく、素手でパンチを受け止める。

小松 あまりのきみの頓狂さに訊ねるのを忘れていたんだが……

大塚 (びつくりしている)

小松 ……とこでさ。ここにどうやって入ってきた？ だってここは、田口らの手によ

つて引田テンコウでも脱出出来ないぐらいに封印されていたというのに……

大塚 (自慢のパンチを止められた動揺を隠しつつ……) おつ、大馬鹿タコ之進か、おまえは？ 中からは脱出不可能でも、外からは簡単に開けるだろうが。鍵だつてドアの近くに放り投げてあったし……

小松 と、いうことは……

小松、抜き足差し足で舞台奥の方へ移動し、ドアのあるらしき方向をのぞき込む。満面の笑みを浮かべて振り返る、小松。右手でやたら気合の入ったOKサイン……

小松 おっけー……せんきゅう、キャサリン！ (深呼吸して) 一週間ぶりの娑婆の空気だぜ！ んーつ、一九九五年の香り！ じゃあな！ (出ようとする)

大塚 (制して) 待ちな！ 小松さん、あんたはラストシーン書き上げなきゃなんないんだろ！ 小松和人——劇作家、そして演出家。一昔前までは、けっこういい本書いて、いい芝居作ってたらしいじゃん。それがここ近年、鳴かず飛ばずで、作品荒れてきちゃって……三流劇団の仲間内であんたなんて呼ばれてるか知ってる？ 「小松は憑き物が落ちたみたいだぜ。ヤツはもう小松じゃなくて、枯渇だ。絞つても何も出やしねえ。」

小松 小松じゃなくて枯渇か？ (吹き出して) いい駄洒落だ。ねえちゃん、おまえ、今作つたろ？ だって、ちよつと面白すぎるぜ……

大塚 げんなりした？ あたしなんでも正直に言うタイプだから……

小松 じゃえんじえん！ 小指の爪の先ほども。

大塚 田口さんだつてそう言つた。

小松 あ野郎！ ちよつといい気になつてやがんな！ 今度会つたら、話合いで解決

しよう！

大塚 ……人間丸いね、あんた？

小松 そう？……さてと、キャサリン。俺ちよくらそこいらを走ってくるからよ。

大塚 逃げる気かい？

小松 とんでもねえ！ ラストシーンを練り上げに行くんだよ。

大塚 走ってか？

小松 ……日本人は立ち止まってる。イギリス人は歩きながら考える。ドクター中松はジャンピングシューズで、飛び跳ねながら考える。因みに、オーストラリアに居るのは、カンガル。そんなもつて、俺は走りながら考えるつてわけさ。ラニンング イズ シンキングだ！ 心配なら付いてきな……

大塚 (笑つて) 勝手にしな……

小松 (すでにアキレス腱を伸ばしたりしている)……そいつはよかった。高校時代、マスタートダイガーと呼ばれた俺におまへごときに付いてこれるわけがないからな……

大塚 そいつはどうだか？

小松 口のへらねー女だな。じゃあ、俺は行くぜ！ (と、走り出す)

大塚 待ちな！

小松 人が走りかけてんの、止めんじゃねえ！

大塚 ときに、マスタートダイガーつてなんだ？

小松 ケツ穴にからし塗られた虎つて意味だ……(凄い勢いで飛びだしていく)

大塚 ……しょうがねーな。

大塚も、これと言つてやることがないので、小松を追つて走り出す。

音響と共に、舞台は急速に暗転する。

題して『亡骸不在の告別式』

明転するとそこは「アトリエ」アトリエといつてもただの倉庫なのだが……コンクリート打ちっぱなしの壁に不細工に突き出したままの鉄筋や潰れた配管が埋もれている。壊れかけた木箱、段ボールの切れ端、そして黒ずんだ石油ストーブが一つ。アルミの灰皿の上の吸殻のピラミッド―壁には『倉庫内裸火厳禁』の貼紙―おや、よく見ると『厳』の字が変だぞ。ギターやアンプやぶつ壊れた鍵盤やわけの分からないコードの類が散在している。

舞台の上には田口(舞台監督)、三森信(新看板男優?)、吉田さん(おやじ)、小埜(「おの」つて読むんだと……)咲智―こいつは子役と呼ばれる女優だ!、それからあと藤原君(ぼんぼん―カマロ持つてるつて噂)。皆それぞれ好き勝手に、ギター抱えたり、ストロブで手炙ったり、マンガ読んでたりしてる。ただ、田口だけは体を硬直させたまま、突っ立っている―きつと怒ってるんじゃないの。

ぬあにー? 小松が逃げただとおー!

……そお、みたいね。

田口 何が「そおみたいね」だ! 他人ごとみたいいうんじゃねーよ! 誰だ、第一発見者は?

藤原 ぼくちんでーす。(手上げて……)

田口 ぼくちん? ……今、ぼくちんつて言い放ったのは、おまえか?

藤原 そうです。

田口 てめー、今がどういう状況にあるか分かった上での狼藉か?

藤原 だつて、小松さん、いつも決まっていなくなるじゃないですか?

田口 そうだね、そうだね、その通りだね。藤原君の言うとおりの、前回も、前々回も奴は、リンドウ湖ファミリー牧場だの、とうじんぼうだの、鳥取砂丘だの、突然旅に出ちゃいますよ。だけどね、それは今回のようにこんなに押し迫った時でしたか? 本番一週間前でしたか? 考えてもの喋れよな、くら! (藤原の胸

ぐらを掴む)

三森 ……田口さん。腹いせに、藤原に八つ当たりすることないだろ。

田口 八つ当たり？

三森 そうっすよ (藤原に)なあ？

藤原 (ちぎれちゃうぐらいに首を振る)

田口 八つ当たりしてるって、誰がじゃ？

三森 あんた。

田口 三森ちゃんよお、はいはい、分かりましたよお。おれは単に、藤原くんが発見時の模様を聞きたいだけなの。なつ、藤原君(と、手を放す)

藤原 (咳き込んで)……はい。では、私藤原、発見時の模様を述べさせていただきます！ (と、突然！ 芝居がかった口調になる藤原君) ……そうでした、思い

起せば(いちいち思い起こすな！) ……あれは今から三十分程前のこと……小雪のちらつく一月の或る日のことでした。新年開けての初の合同練習、それに小松さんの脚本も出来上がるという風の噂も何処からか聞こえて参ります……

田口 ……おめえ、普通に喋れんのか！

藤原 (聞こえてない)いつにもまして機嫌の良い藤原君はいつものように練習場に一番乗り！ と、思いきや、おや？ 扉の鍵が開いている……ちっ、一番乗りは逃しちゃったぜ！ と、一人ごちる僕……「明けておめでとうございませ」なんて声を張り上げ、扉を開けてみると、なんと中はもぬけのから！ 人っ

田口 こ一人、猫の子一匹おりませんぜ、親方！

藤原 誰に喋ってるんだ？

……ふと、奥を見ると……あの隠蔽された扉が開いている！ 急いで駆け込む藤原君、だがその中にすでに小松の姿はなかった！ ……こいつは当代流行りの神隠しってえしろもんかい？ しばし考え込む藤原君。その時だった！ 近付いてくる不穏な足音、背後から冷たい手が僕の肩口をむんずと掴んだ！！

三森 (いつのまにか藤原の背後に周り、肩を掴んでいる) よっ、ハッピーニューイヤ

！…

藤原 (びっくりして)なんだ三森さんか、びっくりさせないでよ。

三森 どうだしゃっくりが止まったろ？

藤原 ……しゃっくりなんか、端っからしてないって！

三森 ははは、そうか。

三・藤 はははは……

田口 おい、その馬鹿二人！ おめえらまどろっこしいんだよ……藤原、聞いた俺が悪かった……

藤原 ……田口さん、しっ！ ここからがいいところなんだから……ていへんだ！ 親分。

三森 八！ おめーのてーへんは聞き飽きたぜ！

藤原 小松の旦那が神隠しに……

三森 何？ 小松の旦那が……錠前が全て鍵で開けられ、鎖もきれいに折り畳まれている、扉も壊れていないところを見ると……こりゃ小松が自力で抜け出た風じゃなさそうだな……

藤原 するつてーと、誰かほかの奴が手引きしたと……

三森 そういう事だ……(藤原が鎖を持ち上げようとするのを制して)こら、鎖にさわるんじゃねえ！ 現場の保存が捜査の上で一番重要なんだ。「現場百回」、殉職した大滝刑事の口癖だったよな……

藤原 失礼しました、三森警部補。私が迂闊でありました。

田口 (今度は刑事もんですか……ポリポリ)

三森 いいか、藤原。現場にはな、謎を解く鍵がたくさんおつこってるんだ。例えば、お前の足元……そこに靴跡がしつかり残ってるだろう？

藤原 あつ、本当だ！ 入口から小松のいた部屋までくつきりと泥だらけの靴跡が！ 現場の保存―これが捜査の基本だ。この足跡が事件解決の手がかりとなる……鑑識を呼べ！

藤原 はい！ 鑑識っ！

小埜

(今、登場したって感じで…) 新年明けましておめでとうございます、藤原君。三森さんも明けましておめでとう！ …あらあら、なにこれ？ 床が泥だらけじゃん！ もー、田口さんに怒られちゃうぞ。はいはい、モツプ (二人にモツプを手渡す) さつ、早く、拭く拭く！

三・藤

そうだな、田口さんに怒られちゃかなわねーな… (折角の足跡をきれいに拭いてしまう)

田口

ちよつと待て、その馬鹿二人。何が「現場の保存」だ！ 証拠隠滅してるじゃねーか？

藤原

証拠隠滅？

三森

そうとも言う…

田口

そうとしか言わないんだよ！ で、その足跡つてーのはどんな奴だった？ でかいのか、小さいのか、スニーカーか、それとも安全靴か？

三・藤

(可愛く、かたをすくめる)

田口

この底抜け脱線ザル頭が！ (堪忍袋の緒が切れたって感じ)

吉田

(田口を制して)…そうかつかするなよ。奴らも悪気があつてのことじゃない… (…何処にいたんだ、こいつ？ーきつと舞台奥でギターを爪弾いていたのさ。彼らのコントにあわせて…)

田口

そんなこと言つたつて、吉田さん…

小埜

生まれ付いての馬鹿なんだから、怒つたぐらいいや治らないつてーの… さつ、いつものクールな田口さんに戻りなよ。

田口

…あのさ、おまえだつて…

小埜

ステイ・クール(親指立てて、ぐいつと腕を突き出すーおいおい、ぼおず。そいつは何の受け売りだ？)

田口

(それを受けて)…はいはい、クール。…いや、分かてるんだよ、怒鳴つてもどうにもならないことは。でもさ、今回ばかりは心配なんだよね…公演のこと、奴のこと… 小松、そーとー追い込まれてただらう…

吉田

小松つてさ、追い込まれないとなにもしない奴だろ？ でもさ、追い込まれ過ぎ

ると簡単に壊れちゃうんだよね。なんて言うか、だめになるぎりぎりのこんな狭い幅のところで頑張っちゃてるつていうか…

小埜

ナイフの刃の上を一気に駆け抜けてくつて感じよね…

三森

おいおい、ナイフの上走つたら、足の親指と人差し指の間が、ピーつて切れちゃうだらうが、ピーつて…

吉・小

だから比喩だらう！

三森

分かてるよ。ちよつと戯けただけでしよう！

田口

三森、おまえ少しはまじめに考えろよ、なつ？ この危機的状況なんだから！ 人生ふざけつぱなしでいいつてもんじゃないぜ！

三森

おやおや、私が人生ふざけつぱなし？ 私は常に真つ正面から物事に取り組んでるつもりですが… (田口と額を突き合わせる)

田口

…この機会だから、はつきり言つときたいんだけど… 聞いたところによると、おまえ、最近いい気になってるんだつて？ (文字通り額を突き合わせ、グリグリしあうーこれがかく言う「グリグリ合戦」だ！)

三森

いい気に？

田口

…なんだか、剣が抜けたのをいいことに、いたるところで「俺が看板役者だ」つて吹聴してるらしいじゃん…

三森

その通りじゃん！

吉田

おや、そいつは聞き捨てならないねえ、三森さん。(グリグリ合戦に参加)

三森

では、あなたが看板役者とか？ これは笑止…

吉田

真つ向から勝負を挑もうつてわけじゃないが、ちよつとね…

藤原

(参加して)…待つて下さい。それについては、ぼくも一言あるぞ！ (なんだ「一言言」つて？)

三森

なんだよ、こいつまで！ 何か文句でもあるつていうのか？

全員

おおあり！

小埜

(何故かグリグリ合戦に参加して)…ちよつといいかな、てーことはだよ…その流れから行けば、加奈さんの抜けた今、私が看板女優つてこと？

全員 (真顔で) 咲智、それは、違うな！

田口 とにかく、三森、おまえがいい気になり過ぎてるってことだ！

小埜 (ちよつと怒つちやった) …あのね、あんた達！ 今はそんなこと言ってるときじゃないでしょ！

全員 分かってるよ、んなこと！

小埜 そのグリグリ合戦はね、やつてるときはいいけど、あとから痛くなってくるんだから… 額の毛細血管、切れまくるんだから…

三森 痛みのない勝負は勝負じゃねえ！

田口 三森が弱音吐くまで押し続けてやるぜ！

三森 なんだと！ こなくそ！

吉田 負けるもんか！

小埜 頭外骨歪んで脳に傷害残つても知らないよ！

藤原 あつ！（急に立ち直る、藤原。そのあたりをくつて全員こける）

三森 急に、なにすんだ、藤原！ あぶねーだろ…

藤原 思い出した！ グリグリ合戦の脳への刺激によって、思い出しました！

田口 思い出したって、何を？

藤原 足跡…あれ、ハイヒールの足跡だったよね？

三森 そう言えばそうだったような…

藤原 そうだよ、確かにハイヒールだったよ。

田口 ハイヒール…すると、小松逃がしたってーのは女か？

全員、小埜の顔を、そして足元を見る。

小埜 なんだよ？

全員、力無く首を横に振る。

田口 小僧にハイヒールは似合わん…

全員、頷く。

田口 じゃあ、いったい誰だ？

三森 小松の女？

藤原 小松さん、女たくさんいますもんね…

田口 馬鹿だな。奴は表層でしか女とつき合わないんだ。奴の危機を救ってくれるよ

うな甲斐性のある深い関係の女はいないだろ。

吉田 ひどい言い様だな…

田口 間違ってる、俺？

吉田 いや、正しい。

三森 とすれば、誰？

田口 ちよつと待て！ そういえば… 加奈のかわりの客演の女優が来る事になつて

たんだ！

小埜 何とか大塚！

吉田 キヤサリン大塚だ。

田口 そう、それぞれ。

三森 きゃさりん？ ハーフか？

田口 いや、オカマじゃ無くて、女だ。

三森 そうでなくて、ハーフ？

田口 お前、うるさい！

藤原 まさかその人が？

田口 ありうる…

小埜 でも、なんで？

田口 分からん… でも現にいないだろ？

小埜 遅刻かも？

田口 新年明けての初顔見せだ！ 遅れてきたら、やる気を疑われる。
藤原 でも、もつくだって来てないよ。

田口 もつくん？ あつ、ほんとだ！ あの馬鹿、新年早々遅れやがつて…

小埜 まあまあ、怒んない、怒んない…

田口 しかし何故、キヤサリン大塚が？

三森 なあ、田口さん。キヤサリン大塚つてハーフ？

田口 (面倒臭くなつて) はいはい、ハーフ、ハーフ…

三森 (何故かほくそ笑む)

小埜 まさか、小劇団撲滅委員会のエージェントだつたりして…

田口 なんじゃそら？ 文化庁の秘密組織か？

藤原 いや、警視庁公安部の秘密組織ですよ、きつと…

田口 藤原、いたずらに話を面白くすんな！ …しかしな、本番一週間前に脚本家が疾走、無理して頼んだ客演も来ないとなると…

なんてみんながごちゃごちゃやつている最中、舞台後方にもつくん現れる。ちょっとばつが悪そう―もじもじしている。吉田、それにいち早く気付き…

吉田 やつと主役の登場か？

振り返る、みんな。

茂木 …みんな、怒ってる？ いやいや、怒られて当然でございます。ですが、これには深いわけがありまして…じつは、新宿駅でUFOに連れ去られて、どうやら人体実験を受けたようで、その間三十分の記憶がないのです…

田口 …言い訳はそれだけか？

茂木 はい、田口さん。すいませんでした。以後二度と遅刻は致しません！

田口 ああ、もつくん…

茂木 はい。あの、台詞の方は努力しました。正月中ずっと台本とともに寝起きし…

田口 もつくん、今、それどころじゃないんだ… あのな、小松が逃げた…

茂木 へ？ 今、しれつと何言つたんですか？

全員 小松が逃げたの！

茂木 あの… 小松さんが逃げたつて…(小部屋の扉が開け放たれているのを見て)…なんで？

田口 知らねえ…

茂木 行く先は？ 誰も心当たり無いんですか？

全員、首を振る。

三森 今度は竜飛岬あたりじゃねーか？

茂木 みんな、何なんですか？ 手がかりは無いんですか？ 田口さん、部屋の中見

ました？

田口 ああ、もぬけのからだだよ…

茂木 いえ、ちゃんとですよ！ 何か書き置きがあるかも知れないじゃないですか。

田口 そうか！ 書き置きか！

茂木 そうです。

三森 まさかワープロに遺書が打ち込まれていたりして…

田口 縁起でもねーこと言うな！

吉田 わからんぞ。あいつ、見かけによらず線が細いから…

田口 吉田さんまで、なんてことを！

小埜 とにかく、部屋の中探しましょうよ。

田口 ああ、そうだな…

田口 立上り、部屋の中へ走り込む。皆もそれに続くが、茂木だけ舞台上に残

る。

茂木

……とんでもない事になりました。看板女優の加奈さんが抜け、主演の剣さんが抜け、今度は小松さんまで……果たして「アモーレの鐘」は上演出来るのでしょうか？ 本番まで一週間、もう秒読み段階です……

田口

（舞台裏から）もっくん、お前誰と話してんだ？ 早くこっちへ来い！

茂木

はい！ すいませんでした。

茂木、走って退場。

舞台は闇に包まれる。

炎のランナーども

あのヴァン・ゲリスの名曲が流れる中、ゆつくりとサスが走るキャサリン大塚を浮び上がらせて行く。当然、キャサリンはスローモーションだ！

大塚

……僕たちは走っていた。喧噪の街を抜け、灰色のバイパスを越え、ひたすら西へ西へと…… ゆつくりとした時の流れの中を、滑るように、泳ぐように…… 僕たちは、あの夕日に一歩でも近付こうと走り続けているんだ！

照明が明るくなつて行き、やがてキャサリンの周りをつたうようにジョギングしている小松の姿が明らかとなる。

小松

あの、どうでもいいけど…… スローモーションで走りながら、わけの分からん独白の止めねえか？

大塚

（音響、ぶった切れる）あつ、わりーわりー。何だか普通に走るのに飽きちゃつてな……

ジョギングを開始する二人。

小松

そうか…… やっぱ、飽きるよな、だつてもう五時間は走り続けているもん……

大塚

もう五時間も！ どおりで、日が傾いてるもん……

小松

よし。じゃあ、あの一キロメートルぐらい先に堤防が見えるだろ。あそこをゴールにしよう。

大塚

おっけー、勝負だ！（と速度を上げる）

小松

のわーっ

おいてけぼり食う小松。しかし、猛然とダッシュუნでもつて追いつくサイドバイサイドの見応えある攻防だ

小松 …おまえここにきて、こんな力まだ残してあったのかよ…

大塚 あたしめーじゃん。このキヤサリン大塚を嘗めるんじゃないよ！（更に加速）

小松 くそつたれ！ 負けるもんかあ！！（加速） あ、のよ、さっき言いそびれたが…

大塚 なんじゃ？（加速）

小松 お前、自分のこと「ぼく」って言うの止める！（加速）

大塚 あんた、危ないから口閉じた方がいいよ（加速）

小松 危ない？（加速）

大塚 ああ、そろそろ音速越えるよ…（加速）

小松 おおお、音速！（加速）

大塚 さあ、これが音速の壁だあ！（加速）

轟音！―吹っ飛ぶ二人。へたりこみ、肩で息をしている…

大塚 どうやら同時ゴールみたいだね…

小松 ああ…しかし、これがかく言うサウンドバリアーってやつか… けっこーな衝撃だな。

大塚 よくついてこれたね、あんた。世界広しと言えど音速越えれんのは、アナボリック・ステロイド打ちまくってたころのベン・ジョンソンとわたしだけだと思ってたよ。

小松 （いえ、きつと世界広しと言えど、あなただけです…）

大塚 俺だつて初体験だよ。あーあ、摩擦で服が焦げてんな…

小松 さすがにマッハで走ると疲れるね…

大塚 そうだな…この河原で休んでいこう。

堤防を駆け下り、河原で体育座りする二人。

小松 川はいいねえ…心が洗われるようだ。

大塚 で？ 出来た？

小松 出来たつて、何が？

大塚 ラストシーンの構想。

小松 ははは、ぜんぜん…（唐突に思い直し）出来てるよ！

大塚 けっこー、強がるね…

小松 強がつてないつて！

大塚 またまた…じゃあ、教えておくんまし。

小松 やだ。なんで、お前みたいなぼつと出に…

大塚 ぼつと出とは失礼だね。あたしは客演様だよ。それも本番まであと一週間という超ハードスケジュールのおまげが付いても引き受けてやろうという希有なお人だよ。世界広しといえど、こんなとんでもねー条件飲むのは往年の雪村いずみとわたしぐらいのもんだよ。感謝せよ！

小松 感謝はしてますつて、もう胸の中は感謝の気持ちで一杯よお。腕の良い外科医がいたら、切り開いてもらつてあんたに見せたいぐらいだよ。

大塚 だったら、エンディングの構想とやらを聞かせてくれてもいいだろう？

小松 しょうがねーな…聞きたきや、教えてしんぜましよ…因みに、今回の本読んだ？

大塚 当たり前でしょ！

小松 ここだけの話、どうだった？

大塚 わけ分からなかった…

小松 やっぱし…実は俺もよく分からん（二人、力無く笑うが）…笑いこっちゃないよね？

大塚 …大丈夫か、お前？

小松 大丈夫、大丈夫。では、きみ、あまり理解してないようだから、作品の解説から始めよう。

大塚 おまえさんだつて、理解してないんだろう？

小松 その通り！

大塚 素直な野郎だな、まったく……

小松 そうだ、私は無垢な少年のように素直で強情だ。というわけで、今回の作品

「アモーレの鐘」はその名の通り愛のドラマだ……

大塚 アモーレってのはイタリア弁で「愛」だもんな……

小松 そうだ、そのイタリアだ！ これは現代の日本を舞台にしながらも、その根底にはイタリアンテーストが流れているんだ。

大塚 イタリアンテースト？

小松 そう、そしてイタリアと来れば「マカロニウエスタン」！

大塚 そうか？

小松 俺にはこれしか思い付かん。誰も気付かないだろうが、これは歴としたマカロニウエスタンなのだ！ 主人公、それは荒れ果てた街に突如現れる流れ者……

大塚 そうだつたっけ？

小松 読みが浅い！ 奴は有機野菜宅配便「ポポロ自然農場」の人の良い運転手だが、元はガンマンだったという設定だ。

大塚 でも、主人公の名前「よひよう」だろ。それに「うんず」とか「そうど」とか出てくるから、わたしやってつきり……

小松 それは単に、表層のストーリーにしか過ぎん！ 上辺だけ読めば、これは単につうとよひようの立場を逆転させた夕鶴のパロディに思えるだろうが、その根

底にはあの不朽の名西部劇「シェーン」が脈々と脈打っているのさ！

大塚 ちよつと待った！ 「シェーン」はマカロニウエスタンじゃねえぞ。

小松 小さいことは気にするな！

大塚 気になるよ。あんたやつぱり見かけどおりに知恵足りないだろう？ ……いやいや、よく分かりましたよ。あんたが脚本仕上げられないの……だって、しよっぱなの

構想からしてやけくそなんだもん……

小松 やけくそその何が悪い？ 構想において重要なのは純粹さだ！ 私の場合、純粹なやけくそだから良いのだ！ ……私の筆が進まんのは、そんな枝葉末節のこ

とではない！

大塚 はいはいはいはい、そうでございますか。枝葉末節ですか……じゃあ、あなた様を今悩ませているものは何なんでございましょうか？

小松 それは「約束」…… 田口との約束だ！

大塚 約束？

小松 そう、今回新境地を開くため、一つの約束をした。それは「血腥いことはしない」というものだ。殺人なし、武器なし、テロなし、ゾンビなし…… 最初は簡単に考えてただけど、ここに来てそれがネックになってな…… だってマカロニウエスタンなのに鉄砲も殺人も無しなんだぜ。「シェーン」だって、最後にや人殺して

るだろ。それが感動的なエンディングの「シェーン・カンバック」に繋がってるわけ

でさ……

大塚 はいはいはいはい、そうでございますか。それがネックなんですか…… では、最後に「忠告申し上げますよ。そんな約束破ればいいじゃん！ じゃあさようなら……（と、立ち去ろうとする）」

小松 待て！ お前今なんて言った？ 約束を破るだと！

大塚 ああ、そうだよ！ 破つちまいな、そんな約束！ じゃあな……マラソン楽しかったぜ……

小松 待て！（逃がさないように大塚の腕を掴む）

大塚 怒ったのかい？

小松 約束を破る……（何故か、笑みがこぼれ始める）そうか！ なんでこんな単純なことに気付かなかったんだろ！

大塚 どうした？ 発狂したか？

小松 ありがとう、キャサリン大塚！ そうだよ、約束なんか破つちまえばいいんだ！ 胸の問えがすつと取れたぜ…… あんた命の恩人だ！

大塚 あ、あのさ、あたし……

小松 さつ、こうしちゃいらねーぜ！ 早くアトリエに帰ろう！ 構想がとめどなく噴き出し始めてるぜ！

大塚 だからさ、あたし……

小松 また音速越えるぜ！ 準備はいいか？（大塚の顔を見て）キャサリン、おれは今、生涯にまたとないくらいに猛烈に感動している。

大塚 あたしや、客演受けてたつたのを、生涯にまたとないくらいに猛烈に後悔しているよ。

小松 おや？（キャサリンの顔をまじまじと見つめる）

大塚 なんだよ、気持ちわりいな。

小松 ……今、お前の顔まじまじと見て思っただけさ。おれ、あんたと何処かであつてるよね、過去に……

大塚 ……やつと思いついてくれたのかい、私はお前が三つの時に満州で生き別れになつた、お前の本当の母親だよ……（あんまり、やる気ない）

小松 冗談はいいからさ……（顔を見たり、腕組んで考え込んだり……）

大塚 真顔で対応するなよ……（あんまり、やる気ない）

小松 あつ、思いついた！……おまえ！ そうだよ！ 学生のころあんたのでた芝居見たことがあるんだ！ そうだそうだ！……なんつったけな、あの劇団……

大塚 思い出した！ ワシ・ナイト・シンデレラだ！

小松 げつ！ あんたワナシン（略すなよ！）見たことあるの？（結構、動揺している）見た見た。ワナシンだよ。すげー人気あつたよな、女の子だけの劇団でさ……

大塚 派手なドレスやミニスカートやバレーのチュチュなんかで明るく脳天気で内容の無い芝居やつてたのにな。

大塚 けつー、言い倒すね、あんた……

小松 そうそう、おまえそんな中でいつも漫才みたいのやつてたよな……あのデブチンと一緒に……

大塚 デブチンはないだろ、あんた……啓子はいい奴だったよ……

小松 そうだ！ ケイコ&ハルコだ！ はつはつは……完璧に思いついちゃったよ、俺……おまえの名前、大塚晴子だ！ はつはつは……

大塚 その名前、もし他人に漏らしたら……三回即死させてやるよ！

小松 わかったわかった、言わねえって……確かに、あの劇団のなかじや、お前が群を抜いてうまかったよ。

大塚 「あんがと」っていつとく、一応……

小松 ほら、受付のところで役者の生写真とか売ってたじゃない、けつーいい値で……買った、買った！ 買った買ったよ。

大塚 まさか私のじゃないよね……

小松 あたりめーだろ。岬由里架ちゃん（なんちゅう名前じや！）のだよ……彼女、すっげー美人だったろ。

大塚 由里架、きれいだったもんね。もう、結婚しちゃったけど……

小松 人の妻か？ げんなりだな……

大塚 ……因みに、ここだけの話、あんなであたし何番目にきれいだった？

小松 二番目……

大塚 えつ、由里架の次？

小松 馬鹿、下からだよ……あのデブチンの次。

大塚 ……あんた、へらへら笑いながら、失礼なこと言いまくってるよ。

小松 客観的事実だろ……

大塚 ぐつ……実はね、あたしもあんたの芝居見たことあるんだ、すげー昔の……ほら、真夏にきたねーほつたて小屋みてーなところで、やったヤツ！

小松 うつ、ぎくつ……過去の話はお互いやめにしないか？

大塚 話そうにも、あまり記憶に残ってなくてさ……

小松 それはそれで、ちこつと悲しいものよね……

大塚 ただ、ひとつだけ憶えていることがある……（遠い目をして）……暑かった、とつても……

小松 暑かったよな、ありや。クーラーの手配が間に合わなくてさ……役者の大半、脱水症状起こしかけてたもんね……（遠くを見る）

大塚 違うの。そうじゃなく……

小松 おつと、もう御天道さんが、西の山辺に隠れちゃったじゃねーか！ キャサリン、

どうやら無駄話をしている暇はなさそうだぜ・・・ さあ、行こう！ 音速の壁貫いて・・・ ゴー！

ちよと待てよ、あんた！（小松さんよお、ホントに身勝手な奴だな、あんたは・・・）

発狂したように加速する二人をゆつくりと闇が包んで行く・・・

放蕩息子の帰還については聞かなくてたまえ

暗闇の中から藤原の声、「小松さん、やつぱり頭の線切れちゃったんでしょうか？」。ワープロのCRTの光がほの暗く人々の影を映し出す。

照明ゆつくり明るくなっていく。あの「地下室」。ワープロを囲んで立っている田口、三森、藤原、吉田、小埜、そして茂木。

三森
（ワープロを操作し）意味不明の文字が十数ページにわたり打ち込まれている・・・

小埜
・・・確か、キューブリックの映画でこんなのあったよね。ある別荘で奥さんが物書きの旦那の原稿の束をなげにのぞき込むと、そこにはびつしりと・・・

吉田
All work and no play makes Jack a dull boy・・・

小埜
たしかあれは・・・

三森
イカリング。

吉田
シャイニングだろ！

田口
この期におよんでも、ボケなきや気がすまんなのか、おのれは？

三森
場を和ませようと思つて・・・

田口
和まなくとも良い！

藤原
ねえねえ、吉田さん。さっきの英語の意味、なに？

三森
わかんねーのか？ おめー、ぼう私立大学の学生さんだろ？

藤原
でも、経済学部ですから・・・

三森
はーっ、さいですか・・・

吉田
「よく遊び、よく学べ」って意味だな・・・

藤原
（吹き出して）それなんか可笑しくくないですか？ 小松さんのワープロに「よく遊び、よく学べ」って入ってたらけっこー笑えますよ。

吉田
いや、日本語に意識しちゃうと、そうなんだけどね・・・

田口
（緊張しながら、壁の隙間やドアの陰を覗き込んでいる小埜に気付き）おい、

咲智。お前さつきから何やってんだ？

小埜 田口さん。この部屋に「斧」ってありませんでしたよね？

田口 あるか、普通？ 山奥の炭焼き小屋ならいざ知らず、東京の一般家屋に…

小埜 ほつ…(胸をなで下ろす)

田口 何が「ほつ」だ。

小埜 シヤイニングの流れから行くと、発狂した小松は斧を振り回し私たちを殺しに来るに違いないのさ…

田口 違うのさつて、おまえ？

小埜 斧が無いなら、きつと肉切り包丁か… いや、でかいカッターナイフかな？ それで、殺戮を繰り広げるんだ！ まず、第一の被害者は藤原くんね。

田口 なんで？

小埜 それは彼の腹立つぐらいの純真無垢さ… B級スプラッタームービーでは往々にして状況を飲み込めない純朴な男が最初に血祭りに上がるものさ…

田口 おい、藤原。お前最初に殺されるんだと…

藤原 (三森とともにCRTを見つめていたが、顔を上げ) えつ、殺されるつて誰に？

吉田 小松。

藤原 何で小松さんに？

田・吉 (肩をすくめる)

小埜 …：そうして、次から次に殺されて行き、最後に残るのは吉田さんと私。

吉田 なんで、俺？

小埜 この中で一番落ち着いてるから。

吉田 それは、ありがとう。

小埜 でも、そんなしつかり者の吉田さんも、私を助けようとして死んでしまうのよ。うつつうつ…

吉田 (田口と顔を見合わせ) やっぱり…

小埜 そして、たった一人残るヒロイン、小埜咲智。残酷ショッカー物の宿命、か弱き女がただ一人、殺人鬼と対峙する！ 戦え、咲智！ 悪夢に終止符を打てる

のは、お前だけだ！ (うろろろしている茂木に気付く) 何やってんの、もつくん？ うかうかしていると藤原くんより先に殺されちゃうぞ！

はい…(わけも分からず、小埜とともにびくびくしている)

…どうしちまつたんだ、こいつ？

(ただ、首を横に振るのみ)

三森 (食い入るようにCRTを見ていたが、唐突に声を張り上げる) 分かった！ どうした、三森？

田口 田口さん。これ暗号だよ！ この意味不明の文字は暗号なんだ！

ホントか？

三森 ああ。田口さん、英語の中で一番よく使われるアルファベットってなんだ？

なんだよ、急に？

三森 (勝ち誇ったように) Eだよ。だから、この文字列の中で頻繁にでてくる8という数字に、Eを当てはめてみた…：そして、その8の前によく同じ二つの記号があるのを見つけた。これがT、H、E…：ザだ！

なんだつて、これが暗号で、しかも英語？

やっぱりだ！ ぼくもそう思っていました…(三森に駆け寄る)

そして、単独でいたところに登場するこの妙な記号が冠詞のAだと考えられるから…

(三森の話に聞き入る田口を制して) 田口！ 黄金虫だ…

黄金虫？

アラン・ポーの「黄金虫」だよ。それにでてくる暗号解読法だ…

じゃあ、小松がそれを使って…

違う、三森がそれ使つて遊んでるだけだ。奴の冗談にのるな！

…：いいか、藤原？ この考えで行くとこの3文字の単語はAで始まりEで終わる事になる…

(げんなりして) あんな三森…

(考え込んでいたが)…：やっぱり、ラストはシヤイニング同様、雪の迷宮庭園ね。

田口 あんな、咲智…… もういい、怒る気失せた……

藤原 Aで始まりEで終わる単語？ AGE？

三森 いや、違うな……

小埜 ……雪の中を逃げる私、追う殺人鬼小松。

田口 (馬鹿三人を後目にへたり込み)……俺、今までこんな連中とやってきたのね……

吉田 劇団なんて、社会不適合者の開放病棟みたいなもんだからね……

田口 冷静な洞察ですこと……

三森 分かった！ AXEだ！

藤原 アックス？

三森 斧だよ！

小埜 斧！ やはり、そうか！ 三森、奴が殺しに来るぞ！

三森 分かった、咲智。さあ、藤原、武装しろ、死にたくなければな……

茂木 咲智さん、ぼくは……ぼくはどうしたらいいのですか？

小埜 もつくんは、私が守ってあげる。

藤原 (小埜に)ぼくは？

小埜 だめ！

藤原 わーん、どうしよう……

吉田 田口、馬鹿四人がリンクしちやったぞ……

田口 放つところ……なあ、吉田さん。やつぱり中止かな、今度の公演……

吉田 このまま、小松帰ってこなければ……

田口 中止の謝罪文配って、当日は劇場前で土下座か…… あの馬鹿三人が遊んでるうちに、俺たちで決めちゃおう。どうせ奴らに言ったら、やだつて言うに決まってる。

吉田 ああ。

田口 吉田さん、中止って言ってくれ！ あんたが言ってくれば俺も決心が付く。

吉田 俺に決定しろつて言うのか？

田口 いや、意見を聞きたいだけだ…… だつて、舞台監督は俺だから……

吉田 (吉田悩んでいるーちよつと、後ろの馬鹿三人がうるさい)……田口、俺は小松を待つ…… 待ち続ける。

田口 吉田さん……

吉田 (立上り)……田口、俺は小松を信じてるんだよ！

その刹那、吉田の言葉に呼応するように小松の声が響きわたる

「吉田さん、あんたいい人だあ！」

皆の動き止まる。

小、小松か？

小松 いかにも！

田口、ドアに向かうが、どうやら鍵がかかっているようで開かない。

……こら小松こを開ける。

どうだ、閉じ込められた感想は？ 俺はその小部屋に一週間も閉じ込められていたんだぞ。

自分で言い出したんだろ。いいから開けろ！

制裁じゃ、人を殺人鬼呼ばわりしたお前らに……

……聞いてたの、小松さん？

私は豪気な性格だが、人の陰口を扉の向こうで息を殺して聞くといったケツの穴の小さい側面も持ち合わせている。因みに、三森。ワープロのそれは暗号なんかじゃないぞ！ ちよつと分けあつて打った意味のない文字の羅列だ！

分かつてたんですけど…… 興に乗ってしまいました！

いいから開けろ！

田口！ 反省の色がない！ 人を信じることを忘れた、そんなあなたに月に代

わっておしおきじゃ。電気消しちゃえ、ぷちつ。

照明が消え、暗闇となる。

田口　こら小松！　なにすんだ！

小松　はっはっは、どうだ、暗闇は恐かろう……　田口、扉から離れろ！　斧で攻撃するぞ！

小埜　やつぱり！

藤原　小松さん、明りつけてください……ぼく暗いのだめなんです……

小松　……

藤原　ねえ、小松さん！

小松　……

田口　どうした小松？

暗闇の中、舞台中央より小松の声

「ライト・オン！」

照明がつく。舞台中央に小松、その傍らにキャサリン大塚。珍妙な決めポーズだ！

小松　小松、地獄のふちより生還！

大塚　アーン、キャサリン大塚けんさん！

小松　（驚くみんなを意にも解せず）　みんな、心配かけてすまなかった……　しかし、もう大丈夫。今、私はとても晴れやかな気分さ……

田口　ということ、ラストまで書き上がったってことか？

小松　そのとおり！　このキャサリンの助言によつて……

大塚　何だかよくわかんないけど、そんなことらしい！
田口　見せてくれ。

小松　（頭を指さす）　この中だ！

田口　まだ九分九厘つてわけね……

小松　違う！　か・ん・ぺ・き。でも明日まで待つてね……

田口　……

小埜　田口さん。大丈夫だよ。今の小松さんは最高にのっている時の小松さんだよ！

小松　その通りだ、咲智！　おっと、それから初対面だろうから、キャサリン大塚を紹介しよう。キャサリン、自己紹介を……

大塚　キャサリン大塚です。がんばりまーす……

三森　田口さん、ハーフじゃないじゃん……

田口　なんだ、ハーフつて？

三森　ハーフつて言っただじゃん、ハーフつて……（泣きそう）

田口　なに泣いてんだ、お前？　変なの……

小松　もう終わり？

大塚　うん。

小松　そう、淡白ね……　よし、あとは明日だ。ラスト近く、主人公の「よひよう」は藤

原演じるところの「そうど」に殺される。しかし、彼は死ぬことがない、やおら立ち上がり、そして自らの正体も開かさぬまま、町を立ち去つて行く……「愛」という荷物を置き忘れたまま……（一人感慨に耽る）　いいか、明日は朝から稽古だ！　どうやら、これからの一週間はお前らの地獄になりそうだぜ！　心して待て、しー・ゆー・ともろう……今夜は解散！　お疲れ様でした！

全員　お疲れ様でした！

わけわかんないけど、暗転しよう……　ねっ？

電話でドキドキ、電話でゲンナリ

明りがつくと舞台上には吉田。ギターをいじっている。
そこに、ひよこりと小松が現れ……

小松 ……吉田さん、まだ残ってたんですね？

吉田 ん？ うん……早く家帰つても、することなくてな……明日から会社休む事になつてから、早起きする必要もねえし……

小松 何言つてんですか……明日は朝から稽古ですよ。

吉田 朝早いつたつて、十時ぐらいだろ？ 会社の比じゃねえ。

小松 そおつすね……

吉田 そんなことより、お前早く本仕上げろよ。

小松 そうなんですが……

吉田 なんだよ。俺に話でもあるのか？

小松 ええ、まあ……

吉田 煮え切らねえ奴だな……

小松 ……もっくん、今度役者やるでしょ。

吉田 そんなに心配するなつて、もっくんだつてちゃんとやれるさ……

小松 そうじゃなくて……もっくん役者やつちゃうから、モギリがいなくなつちゃうんですよね……

吉田 そうだな……誰かに頼まなくっちゃな。

小松 それで、田口が……加奈さんに頼めつて……俺に、そう言つたんです。「お前

加奈さんと気が合うからな」つて……ほら、田口つてそういうところ鈍感だから……

ねっ？ ……でも、俺それは吉田さんがした方がいいと思うんです、俺じ

やなくて……吉田さんと加奈さんがどうして別れたのかよくわかんないけ

ど……

吉田 おおい、そんな腫れ物にでも触るような言い方よせよ。お前らしくもない。わ

かつたよ、早めに連絡付けとく。

小松 すいません。変な言い方しちゃつて……でも、俺、加奈さんがこゝ辞めたの、俺の責任じゃないかと思ふことがよくあるんです。ほら、俺、女優の台詞つて上手く書けないじゃないですか……描き方も甘いし……だから、加奈さん

吉田 お前のせいじゃないよ、小松。奴は、奴の事情で辞めたんだろ。

小松 ……吉田さん？

吉田 ……なんだ？

小松 吉田さん、加奈さんのこと憎んだりしてないよね？

吉田 憎むわけねーだろ？ だから、かえつて厄介なただけ……はっはっは

（つられて笑うが、ちよつと引きつり気味）

……さてと、じゃあ俺そろそろ帰るよ。

小松 そうすか？

吉田 （立上り）ちゃんと本仕上げろよ。明日の朝までに上がつてなかつたら、俺の

鉄拳がお前のみぞおちに食い込むことになるぜ。

小松 もし上がんなかつたら、劇団員全員の鉄拳が食い込みますよ。

吉田 じゃあな。（去ろうとする）

小松 吉田さん！ 今日のはうれしかったです。田口が公演止めるつて言い出したとき、

俺を待つて言つてくれて……

吉田 当然だろう？ 劇団員全員がおまえを信じてるんだよ……田口だつてそうだ。

ただ、奴は舞台監督だから責任あるだろ……そういう事だ。じゃあな、明日

また会おう……

小松 じゃ……

小松、小部屋に戻る。吉田、ゆつくりと舞台前方にでてくる。ポケットをまさ

ぐり小銭を出す。どうやら公衆電話から電話をかけるようだ。

……（シミュレーションしている） もしもし、加奈ちゃん？ 俺、よし・だ……違

う！…もしもし、私、吉田というのですが…別れてから久々お電話致します…あほか、俺は？（意を決して、小銭を入れ、プッシュホンを押す）…どうせ留守電だ、そうそう…

電話が繋がる。舞台袖に加奈が現れる。

加奈 はい、もしもし、西村です。

吉田 ……

加奈 ……もしもし？

吉田 あつ、加奈？ 吉田です。お久しぶり…

加奈 こちらこそ…

吉田 今度の公演のことで、折り入って相談があるんだけどさ… 街道沿いのガストでカモミールティーでも飲まねーか？ 今からなんだけど、夜分遅くすまないんだけど、でも近くにいるんだけど…

加奈 ……分かつたわ、じゃあ三十分後に。

吉田 OK、待つてる…

吉田、電話を切る。加奈はすでに舞台袖に消えている。

吉田 （深いため息をつき） すっげーどきどきした…

舞台は急速に暗転する。と、舞台上から茂木の声がする。上と下に二本のサス。茂木と小埜を照らし出す。どうやら、二人ともそれぞれ別なところに電話してるみたい…

茂木 ……だから、正月帰らなかったのは悪いと思ってるよ。でもいろいろ忙しくて…

小埜 忙しい、忙いって、いつもそうじゃん。暇は作るもんなのよ…

茂木 んなこと分かってるって… ひと区切り付いたらちゃんと帰るから…

小埜 今度こそ、ホントでしょうね… 待つてるからね、あたし…で、いつ来るの？

茂木 ……そんな正確な日時なんか決められないって！

小埜 そう言つて、また来ない気でしょう。

茂木 そうじゃないって！ ぼくを信じられないのか？

小埜 そうおいそれと信じられますか…

茂木 頼むよ、母さん… そんな泣き言言わないでくれよ… 分かってる… 親父

も今年で定年なんだろう？ なんべんも聞いたよ、それ。

小埜 なんべんだつて言うわよ… メモつてね！ 十三日から十七日まで午後七時から、十四、十五、十六は午後二時からマチネあり… 絶対来てよね！ ……

あのださー、仕事つたつてただのバイトでしょ、あんた？

そうです。どうせただの警備員のバイトですよ… なに？ 親父が地元でいい就職先を見つけてくれた？ ……余計なことしないでいいって！

小埜 そんな怒ることないじゃん… 残業多いの私に怒つてどうすんの？

茂木 ……御免怒つて悪かつたよ。…はい、分かりました、約束するから…

小埜 約束だよ！ 絶対だよ！

茂木 絶対帰るから… うん…

小埜 今度芝居見に来なかつたら、絶交だかんね… 中学以来十年にもおよぶ友情が灰塵に帰すことになるよ…

茂木 はいはい、もし帰らなかつたら、勘当でもなんでもしてください…

茂木・小 じゃあ、また電話するね、おやすみなさい…（二人、電話切る。深いため息をつき…） はーっ、疲れた… もう寝よう…

疲労で重い瞼が閉じるよに、舞台が暗転する。

やきもき・いん・ぎ・がすと

ガキ共のざわめき。ゆつくり明転するとそこは真夜中のガスト。

隅の方にちよこんと座っているのは……なんと！ 木暮崎じゃんか！ 革ジャンにスリムジーンズ。もうすっかりロックンローラーという出で立ちだが、自慢のリーゼントは乱れまくっている。

木暮崎

（げんなりしながらコーヒーをすすって）……はー、この地上最強のスーパーアイドルと呼ばれる木暮崎劍様が、何が悲しくてこんな真夜中のガストになんかいるわけ？ なんて、げんなりしながらお代わり自由のマグカップで納豆くせえコーヒーなんか飲んじやったりしてるわけ？ あーあ……それにしても腹立つのは西の野郎だよな。日暮里キッズカムパニイの座長だか知らねーが、外出りや、ただのしもぶくれのおやぢやねーか！ 失敗したよな……下北の飲み屋で奴と盛り上がっちゃったのがそもその間違いだつたよな……何が「木暮崎くん、俺と一緒にやってくれないか？ キッズの舞台に立つてくれないか？」だよ！ 蓋開けてみりや、ただのその他大勢じゃねーかよ……いや、俺だつて最初から主役だとは思っちゃいないよ……けどさ、演出家に「やってくれないか？」つて熱っぽく語られたら、役振られるつて思うじゃんか、渋い脇役とかさ……そうだよ、そうでした、役はありましたよ……ネズミの役……「んーっ、その小道具のネズミ……それ動き欲しいな……動かないと、ただボロ雑巾がおつこつてるだけつて感じだよな……その先に黒いぼうでも付けて……うんうん、その配水管からこつちの机の下まで動かしてみようよ……あつ、そうだ！ 木暮崎くん。君、小器用だから、そのネズミ動かしてよ……」「はい、西さん！ 分かりました！！ ちゅう、ちゅう……」（突然、駄々をこね始める―床這い蹲つたり……）なにが、「ちゅうちゅう」だよ！ なにが「木暮崎くん。君、小器用……」だよ！（ガストのねえちゃんに「大丈夫ですか？」と声をかけられてしまったらしい―はつと我に返り、何事もなかったように立ち上がる）……これは

失礼しました、お嬢さん、ちよつと持病の疳の虫が出てね……いえ、もう大丈夫ですよ。ああ、そうだ！ コーヒーだけじゃなんだから、唐揚げ頼んじやおうかな。二百八十円だったよね？ ホント安いよな……ガストは庶民の味方だよ、はつはつは……うんうん、そうそう、ひとつ、一皿だけ……（座りなおし）……みんなに謝つて、劇団戻ろうと思つてさ、アトリエの近くまでは来たものの……決心が付かんのよねえ……あんなに扱き下ろしちゃったしな……小松はぜったい許してくれねーだろうな……ここはひとつワン・クッション置いて吉田さんに相談してみつかないか……でもなあ……あーあ、酒でも飲みて……な……飲み潰れるぐらいによ……（クリームソーダの財布―まだ現存しているのだろうか？―を覗く）なんだよ、チャリ銭しか入つてねーじゃん……無理してこんな革ジャン買うんじゃないか、それも刺繍入りの……（振り返ると、背中に「日暮里キッズカムパニイ」の刺繍）今、俺、身も心も寒い……（座りなおし外の風景を見て）はー、まったく、なんて寒々とした風景なんだ……今の俺にや、一月の風は冷たすぎるぜ……あれ？（なんか見つけたみたいよあれ、吉田さんじゃん……稽古、早く終わつたのかな？ でも、変だな、たつた一人……いや、これは神が俺に与えてくれた絶好のチャンスよ！「剣、どうやら運命の女神はお前を見放しちやいないようだぜ……」おっと、いけねえ、自慢のリーゼントが……

と、髪の流れに気付き、木暮崎が櫛で撫で付けている中、吉田が現れる。椅子に座り注文を考える吉田の前に木暮崎が背を向けて立つ。「なんだ？」という感じで顔を上げる吉田。その頃合を推し量つたように、首だけ振り返る木暮崎―何故か口は半開きだ！

木暮崎

よお、吉田さん！

吉田

（すげーびつくりして）……けつ、剣！

木暮崎

そんなびつくりすんなよ……

吉田 なな、何でこんなところに？ お前は日暮里で稽古してるはずじゃ…

木暮崎 …いや、なにね、わざわざ暇つくって、陣中見舞ってとかな？

吉田 陣中見舞？ じゃあ残念だったな… 今日早上がりで、みんな帰っちゃった… そうだ！ 小松、アトリエに残ってるから顔出してくれば？

木暮崎 いや、いいよ…

吉田 でも、忙しいと、折角こんなとこまで来てくれたんだから…

木暮崎 …いいって、気にすんなよ。おいらは無駄足が得意なんだ…

吉田 しかし、お前…見るからにキッズって感じだな。よつ、ロックンロールミュージカルスター！

木暮崎 やつば、そう見えちゃう？ 俺はこれでも隠してるつもりなんだけど、俺のスター性っていうか、そんなところがつい表に出ちゃうんだよね…

吉田 ああ、そうだそうだ。おまえさ、その成り小松に見せてきなよ。きつと奴も大ウケ…

木暮崎 やつ、吉田さん。あんたに会えて、俺ホントうれしいよ。（手を握る）ところで、今夜カネ持つてる？

吉田 カネ？ いや、あんまり…数千円つてとこかな。

木暮崎 ばつちり、充分。はい、おねいちゃん、唐揚げ、こつちこつち。ごめんな、君に内緒で場所変わっちゃって… お詫びつてわけじゃないが、あと、ビールジョッキで二つとポテトフライ貰えるかな…

吉田 あ、だから、小松のところに顔出して…

木暮崎 気にすんなよ。俺、今夜はあんたと話したいんだ。

吉田 わかった。お前に千円やるから、これでローソンで菓子でも買って、小松のところに…（財布から千円取りだす）

木暮崎 吉田さん。気持ちだけ受けとつてくよ。俺は今来るビールだけで充分さ…

吉田 そうでなくって…だからね、おまえはね、ここを出て、小松のところへね…

木暮崎（ビール来る）おー、ねえちゃん、こんなに旨そうなビールをありがとう。さあ、吉田さん、乾杯だ！

ぐいっと喉をならし飲む、二人。

吉田 （息を吐いて）…あのさ、今夜は俺の生涯の中でも三番目ぐらいに特別な夜なんだ…だから。

木暮崎 そりゃ、俺にとつてもそうだよ。なんか今夜は最高の夜になりそうだな、吉田さん…

吉田 そうでなく…（泣きそう…）

木暮崎 おいおい、久しぶりに会ったからって、なにも泣くことないだろう…

吉田 （天を仰ぎ）神様、私はなにか悪いことを致しましたか？

木暮崎 …馬鹿だな、吉田さん。神は俺たち二人を祝福してるさ！

吉田 （あまりの厚顔無知さに、さしもの吉田も切れるときがやってきたようだ）馬鹿は… 馬鹿は、お前の方じゃ！

立ち上がる吉田！ 同時に立ち上がる木暮崎！ バトルか？

いや違う… だって、木暮崎は外を見ている…

木暮崎 （指を指して）吉田さん、あれ、加奈さんじゃ！

吉田 加奈…

木暮崎 （納得して）はっはーん…（もう一度強く納得して）はっはーん… そういうことか？ 別れても好きな人か…

加奈、入ってくる。二人に気付く…

加奈 あけましておめでとうございます。

吉・木 あけましておめでとうございます…

加奈 なんだ、剣ちゃんもいたのか？ どお、練習の方は？（腰掛ける）

木暮崎 いや、あの……俺……

吉田 剣、辞めたんだ……うちの劇団。

木暮崎 う、うん……まーそんなところかな？

加奈 そうなの？

木暮崎 今、俺、ここに入ってるんですよ……(立上がり背中 of 刺繍を見せる)

加奈 日暮里キッズカムパニイ！ 凄いじゃん！

木暮崎 そうすか？

加奈 もてもてじゃん？

木暮崎 いや、そうでもないんですけど……

吉田 (木暮崎をこづく、そして声を出さず口の開きだけで) 「か・え・れ」

木暮崎 (声を出さず口の開きだけで) 「わ・か・つ・て・る」

加奈 なに？

吉・木 いや、なんでも……

吉田 いや、なんか……剣、もう帰んきやいけないみたいで……

加奈 なんだ、久しぶりに会ったのに……なんか用でもあるの？

木暮崎 いや用なんか全然ないんですけどね……

加奈 じゃあ、いいじゃん。もう少しいれば……

吉田 「ぼ・か・(間)……この・く・そ・た・こ」

木暮崎 「す・ま・ん」

加奈 なにやってんの、二人で？

吉・木 いや、なんでもないっす。

加奈 へんなの……で、なんなの？

吉田 なんなのつて？

加奈 だから、今度の公演のことで相談があるって言ってたじゃない。

吉田 そうそう、じつは……今回様々な事情があつて、こいつも(木暮崎のことさ)も

一枚かんでんだけど、もつくんが役者やることになっちゃつてさ……

加奈 もつくんが役者？ 凄いじゃん。

吉田 そんなもつて、代わりにモギリやつてくれる奴がいなくなっちゃったんだよね……

ほら、もつくんつて旗揚げからの専任モギリスト(なんじゃそりゃ?)だろ？

加奈 で、私にお鉢が回ってきたつてわけか？

吉田 いや、俺は役者がモギリやつてもいいんじゃないかって思うんだけど、田口が

さ……

加奈 (考えてるが)……公演つて十三日からだよ……大丈夫、出来るよ。

吉田 仕事は？

加奈 実は辞めたんだ。今は飛び込みのバイトしてるだけ……

吉田 カネの方、大丈夫なのか？

加奈 どうにか、こうにかね……なに、心配してくれてんの？

吉田 いや、そんなわけじゃ……(木暮崎がちよっかいを出すもんだから、怒つて)

「や・め・ろ」

木暮崎 「す・ま・ん」

加奈 なにやってんの、あんたたちは？……分かったわ、その話引き受けるわ……一

身上の都合で、いろいろと劇団には迷惑かけちゃったからね……こんなで罪

滅ぼしになるわけじゃないけど……(立ち上がる)

吉田 あれ？ もういつちゃうの？ (すげー悲しそう……)

加奈 ごめんね。明日朝早く飛び込みのバイトが入ってるのよ。夕方にはアトリエの方

に顔出すから……

吉田 いや、あの……

加奈 そして、本番始まるまでの雑用も引き受けますよ。どうせ、あんた達のことだ

から、衣装もまだ揃ってないんだろ？ じゃあね……(去ろうとする)

(意を決したように) 加奈！

吉田 (振り向く)

加奈 ……どうもありがとう

吉田 ……こちらこそ……じゃ、明日また……(ほんとに去ってしまう)

加奈を見送る二人、吉田は放心している。

顔を見合わせる二人を照らす光の寿命はなんと、あと0・5秒であった。

木暮崎 いい女優でしたよね、加奈さんって…

吉田 ああ…

木暮崎 あんたがちゃんとくわえこんどけばね…

吉田 …お前には「人の気持ちを察する心」とか「人を慈しむ心」とか、そんな人が人たる基本要素がないのか？

木暮崎 あなたの今の気持ち、察しすぎてあまりありますよ… それにこうして、傍らに座っているだけであなたの鼓動が響いて参ります。

吉田 やっぱし？ …剣、ひとつ聞いていいか？ あーゆう時って、なんて言えбайいんだ？

木暮崎 どういう時？

吉田 別れ際、呼び止めた時…

木暮崎 待ちな！ あんたと俺、離ればなれになっちゃったけど…俺、信じてるよ、今でも同じ星、見続けてるって…

吉田 聞くんじゃないかつた…

木暮崎 …今夜はとことん飲み明かしますか？

吉田 ツケの利く店知ってる？

木暮崎 (肩すくめる)

吉田 (財布を取り出し、カネをぶちまける)俺こんだけ…

木暮崎 (財布を取り出し、カネをぶちまける)俺はこんだけ…

吉田 お前チャリ錢ばつかじゃん…

二人、しばし考え込むが…

吉・木 ねえちゃん、このカネで頼めるだけビール！

TMNはTime Machine Networkの略だつて知つた？

明転するところはアトリエ。吉田が倒れている。

田口 (飛び込んできて) 小松！ できたかあ？ おい、こま……(ふと、倒れている吉田に気付く) ……吉田さん、どうしたんですか？ しつかりして下さい……

舞台裏から小松の声「安らかな眠りを妨害するんじゃないやねえよ……」

田口 眠り？ 俺はてつきり倒れてるんだと……

小松 (マルちゃんホットヌードルゴールドを食べながら登場) ……なんだか夜通し飲んだらしくてな、ズルツ、しかし、おやじにしちゃ珍しいよな……とにかく、もう少し寝かせとけよ……ズルツ……あれ？ もう一人馬鹿が横になつてなかったか？

田口 もう一人？

小松 ああ、革ジャン着た馬鹿……ズルツ

田口 革ジャン着た？

小松 まあいいや、たいしたことじゃねえ……ズルツ

田口 で、上がったか？

小松 生理がか？ まだ初潮も迎えちゃいねーよ……ズルツ

田口 (首ねっこひっ掴んで) 小松！ 三つのお願いだ！ こっち見ろ！ はぐらかすな！ カップ麺食うな！

小松 ほー、強く出るねえ…… 最近、俺のかわりに演出の真似ごとするようになって、偉くなったつて勘違いしてるんじゃないのかい？

田口 (にやつと笑つて) どうやら出来たみたいだな……でなきや、こんなに強くは出れないもんな、おまえ。

小松 よく分かつてらっしゃる……出来てなきや、首から「私を鋸引きにしてください」つて看板下げて、正座して待つてるところだ……ズルツ、しつかり、旨いな、このマ

ルちゃんホットヌードルゴールド！ お前も食つてみるよ……(こんだけ宣伝してるんだから、送つてくれねーかな？)

いや、いい。なんか体に悪そうだろ……

PTAのおばちゃんみたいな意見の持ち主だな、お前は……

悪かつたな……

そこへ、三森と藤原が現れる。

三・藤 朝だ、朝だーよ……(歌う)

藤原 おいおい、藤原君！ もう日がこんなに高く上つてんのに朝だなんて……

三森 時間だつて……九時四十五分？

藤原 集合時間の十五分前に来てるなんて……

三・藤 僕たちやる気出しまくり！ (と、倒れている吉田に気付く) ……吉田さん、

どうしたんですか？ しつかりして下さい……

小・田 安らかな眠りを妨害するんじゃないやねえ！

小松 なんだかしらねーけど、朝まで飲んでたんだと……

田口 吉田さんにしちゃー、珍しいけど……

三・藤 なんだ、寝てんのか……

茂木登場。

茂木 おはようございまーす。……あれみんな、今日は集まりいいすね。(と、倒れて

いる吉田に気付く) ……吉田さん、どうしたんですか？ しつかりして下さい……

四人 安らかな眠りを妨害するんじゃないやねえ！

小松 なんだかしらねーけど、朝まで飲んでたんだと……

田口 吉田さんにしちゃー、珍しいけど……
茂木 なんだ、寝てるんですか…… びつくりしちゃいましたよ……

そこに勢いよく駆け込んでくる、小埜。

小埜 ねえねえねえねえ、大変、大変！ 大変なのよ、これがまた……（と、倒れてい
る吉田に気付く） 吉田さん、どうしたんですか？ しっかりして下さい……

五人 安らかな眠りを妨害するんじゃない？

小松 以下同文！

小埜 なに、以下同文って？

小松 めんどくせえから！ ……おめーらがちまちま来るもんだから、その都度説明
しなきゃなんねーだろうが！ お前ら、明日から集団登校な！

小埜 なにいつてんの？ 吉田さん！ （吉田を揺り動かす）

田口 心配すんな、理由（わけ）あつて寝てるだけ……

小埜 そうなのか……つて曖昧に納得してるときじゃないんだった。あのね、ちよつと大
事件なのよ！

三森 なんだ、大事件って？

小埜 昨日の夜、友達と電話してて知ったんだけど…… キャサリン大塚って、TMネッ
トワークだったのよ！

四人 TMネットワーク！

小松 TMネットワークって解散したあの珍妙なロックバンドか？

小埜 違うわよ！ あんたら「あんぐらぶつく」読んでないの？

三森 「あんぐらぶつく」って三流劇団御用達の超マイナー演劇情報誌のことか？

小埜 ご説明ありがとう。その中にTMネットワークってコーナーがあんの…… これ
今朝買ったんだけど……（雑誌を靴からだし、ページをめくる）ほらほら、こ
こ、ここ……TMネットワークっていうのはトラブルメーカーネットワークって意
味なの。ほら、よく劇団の公演に穴開けたりする客演っているじゃない？ そう

いうトラブルメーカーのリストなのよ、これ。みてみて、この中に……

茂木 ……あつ、ほんとだ！ キャサリン大塚の名前がある

田口 同姓同名じゃないのか？

三森 いるか、普通？

藤原 田口さん、そこらへんちゃんと調べなかつたんですか？

田口 ちよつと貸してみろ！（雑誌をもち取る）

藤原 田口さん！

田口 ……なになに、冬の海、さびき釣りに挑戦だ！

三森 田口！ おめー、なに隣の「マイナー釣り情報」読んでんだよ！

田口 いや、気を鎮めようと思つて……

三森 鎮まるか！

小埜 とにかく、どうかしなきゃ……

三森 そうだな…… でもどうやつて？

田口 どうしよう……

茂木 小松さん！

小松 ……俺は、俺は信じねーぞ！

茂木 小松さん！？

小松 そんな訳はねえ…… 奴はTMネットワークなんかじゃねえ、絶対に！

小埜 でも、ここに……

小松 そいつは嘘つばちだ！ 理由は奴がいい奴だからだ！ ……という風に俺が思っ
たからだ！

三森 理由が弱い！

田口 そうだ、お前人を見る目が全然ないだろ！

小松 そこまで言う？

全員 言う！

小松 それに、奴は足が早い！ 足の早い奴に悪い奴なし！！

小埜 ちよつと待て！ ギリシヤ神話の韋駄天ヘルメスは嘘つきと博打うちの守護神だ

ぞ！

小松 小僧！この似非インテリが！自分の才能に自信がない奴ほど、古典だ！

ギリシヤ神話だ！と、騒ぎ立てる……そんなもんは、才能の枯れたくたばり

ぞこないの演出家に、けつこ世の中に一杯いるけど、そいつらに任せとけ！

小松 ……田口さん、小松さんが本気で怒ってる！

田口 もしや、おまえ……

藤原 まさか？

三森 ほんとに？

全員 大塚に惚れたな？

小松 な、なにいつてんだ！

小松 やつば、赤くなってる……

茂木 ほんとだ、ほんとだ……

小松 お前ら、色気づき始めた小学生のようにはやし立てるんじゃない！

藤原 小松さん、気が多いからな……

田口 よし、小松。それなら話は早い……お前、大塚をたらしこめ！

小松 なに言い出すんだか？

田口 お前がぐわえ込んじやえばいいんだよ。

小松 愛は……愛は道具じゃない！

三森 いいじゃないのさ、好きなんだから、自分を偽るわけじゃない！

小松 ねつ、私断然応援しちゃう！

小松 お前の応援なぞいらん！（吉田を起こそうとする）……吉田さん、起きろ！

起きておくんまし……そしてこの蛮民どもに「本当の愛」を啓蒙してやつて

ください！

吉田 （寝惚けて）……もう飲めないつて、だめだめ……あつ、なんだ小松か？

小松 寝惚けてないで、さあ、吉田さん、あなたの口からいつてやつてください！

吉田 なにを？

小松 愛とは何か？

吉田 起きぬけに「愛問答」か？ 愛とは決して後悔しないこととすげー後悔しながら言うこと……

全員 そうだ！ 後悔先にたたず！

藤原 今すぐ！

三森 ライトナウ！

小松 勇気を出して……

茂木 あの娘に告白！

小松 いやだ！

吉田 ……どうした？ 朝っぱらから小松いじめか？

小松 違うの、小松さんね、キャサリン大塚のこと好きなんだつて……でも、彼つたら

素直じゃないから……

吉田 なんだ、小松、そうだったのか？

小松 吉田さん、この鬼畜どもを信じちゃいけない！

吉田 小松、素直になれよ……

小松 吉田さんまで……

田口 頼んだぞ、小松！

小松 やだ！ 絶対やだ！

と、突然！ 舞台の後ろで声が轟く「ならば、その役、俺が引き受けた！」

「その声は、まさか？」と、小松咲智。答えて曰く、「いかにも！ 地上最強のスター、木暮崎剣：ケン：ケン：ケン……（ゴゴ）

どハデな音響、これみよがしの照明！（すいません、いつもこんなで……） 木暮

崎剣のハイパーダンスが舞台上で炸裂だ！

木暮 話は八割方聞かせてもらった……どうやら、おいらの出番のようだな、田口

さん！

茂木 剣さん、帰ってきたんですか？

木暮崎 帰ってきた？ もつくん、人を出戻りみてーに言うんじゃねーよ！ おいらが

来たのは陣中見舞いみたいなもんさ！ おいらの後釜のおめーを叱咤激励に
来たつてわけよ…… おらあ、亀屋万年堂の森の唄だ！ 心して食え！ （菓子
折りを放る）

小松 ……昨日の夜俺の前で泣いた男がよく言うぜ！

しつ、それは言わない約束だったでしょ！ ……まったく口の軽い男と尻の軽い女
にや泣かされっぱなしだぜ…… 田口さんよ、その話乗ったぜ。俺以上の適任は
いないって感じだな…… キャサリンとやら、おいらの虜にしてやろうじゃない
の！

田口 ……あのよ、やつぱり、そういう非人道的なことはやめよう。

木暮崎 そりゃないぜ。俺なら、絶対うまくやれるよ……そんでもって、芝居は大成功。

打ち上げ会場の居酒屋じゃ、俺の話題で持ちきりさ…… 「やつぱ、今回の芝居
は剣がないとどうなつてたかわからねーぜ……」「そうさ、剣がいなくちゃ
な……」「そうだそうだ！」「そうよ！」「そうだわ！」「……こんどの公演は剣が
主役よね……」「そうだそうだ！」「そうよ！」「そうだわ！」「……つてな具合
よ……

小松 酔っ払って、「一兵卒からやり直させてください」って泣き叫んだのは、誰だっ
たっけ？

木暮崎 小松！ お前、ちよつとこち来い！（小松を呼びつけ）……小松さん、お願い
しますよ。ちよつかい無しにしてくださいよ……

小松 俺は真実の声をだな……

木暮崎 （ポケットに手を入れ、くしゃくしゃの札を取り出す）これ少ないんですが取
つといってもらえますか？ いやいや、気にしなくて、けっこう、けっこう……（小
松の肩を叩き）まっ、そういうことで、よろしく……てなわけで、託してみませ
んか？ ねえ、託してみようよ。ねっ？ ねっ？ （田口の肩をもむ）

田口 いいよ、やめたやめた……

木暮崎 そんなこと言わないで……これが俺の起死回生の一発なんだからさ……

そこに、運悪く登場してくるキャサリン大塚。

大塚

わりいわりい、目覚ましがなんなくてよ……でも、駅からここまで音速で走っ
て来たから、体はあつたまつてるぜ！ さあ、稽古稽古！ ……どうしたんだい
みんな？ やつぱり、遅刻、怒ってる？

木暮崎

ハロー、キャサリン。君の遅刻を咎めてるわけじゃない、みんな君の美しさに戸
惑っているだけさ……

大塚

（怪訝そうに）……誰、こいつ？

全員

木暮崎剣……

大塚

木暮崎剣？ （自分の服の袖をまくり上げ腕を出す）……ほらほら、見て見て、
すっげー鳥肌……

三森

想像通り、だめみたいすね……

全員

うん、うん。（力強く頷く）

頑張れ、木暮崎剣！ だけど、暗転。

日常と舞台は紙一重か？

ぽつんと茂木にサス。

茂木

…今朝は、八時に起きた。歯を磨き、顔を洗い、すぐさま飛び出す。だって、十時前には、アトリエに着いてなきゃいけないし…遅刻なんか二度と出来る状況じゃないし…だから、「アモーレの鐘」は聞けないし、鼻毛も抜いてる暇はない。夜間労働者のぼくには、このタイムシフトはちよつと辛い。でも、小松さんの脚本も上がり、稽古がやつと締まつてきたって感じた…客演の大塚さんだつてそんな悪い人にはぼくには思えないし…なんかうまくやっていけそう

大塚
（一瞬サスが屈伸運動をしている大塚を浮び上がらせる）あつそう、どうもあんがと…

茂木
それに、一番うれしいのは…剣さんが帰ってきたことだ。

木暮崎
（一瞬サスが木暮崎と小松を浮び上がらせる）こら、帰ってきたわけじゃねー！ まつ、どうしてもつて頭下げるんなら別だけどな…

小松
……

茂木
やつぱり、剣さんがいないとしまんないよね…

木暮崎
…分かつてるじゃんか、もつくん！（ふと、前を指さし）くら！三森！その演技はそうじゃねえだろ…

三森
（一瞬サスが浮び上がらせる）…そうか？

木暮崎
もつと、こうしてこうだろが！分かつてねー野郎だな…なつ、小松？

小松
…おまえ、ちよつとうるさい！

茂木
練習中にふと目を逸らすと、そこに加奈さんが立つていた…いつの間に來たんだろ？腕組みしてにこにこしていた…

加奈
（一瞬サスが浮び上がらせる）よ、もつくん。あけましておめでとう！今度は役者か？がんばつてね…

茂木

あつ、はい。加奈さんに会うのは、一ヶ月ぶりだろうか？とにかく、劇団が元通りになつたっていうか、なんか、そんな感じで…ただ、吉田さんは加奈さんがあるせいか、けつこー吉田さんなりに緊張していたようだ…

吉田

（一瞬サスが浮び上がらせる）…そうどどん、どうやらあんた銃の撃ち方しらねえ様だな…はつはつは、そんな持ち方じゃ…

小松

（一瞬サスが再び木暮崎と小松を浮び上がらせる）吉田さん、台詞三ページ飛ばしてる…

吉田

あつ、すまん小松。（頭抱えて）…どうしたんだろ？

木暮崎

おいおい、とつあん。まったく先が思いやられるぜ、はつはつは…よし、このシーン、端つからもう一度！それで仕舞いにしよう。明日はラストシーンやるぞ。「そうど」が「よひよう」撃つところな…

木暮崎

…さあ、今日の締めだ！気合入れていけよ！あつ、そうだ、三森。終わつたら、久々ラーメンでも食い行くか？…

茂木

（サスは茂木のみ）…稽古終わつて家に帰ると…またお袋からの電話だ！大学卒業したのに、ぶらぶらしてるな！おやじは今年で定年だ！いい就職先が見つかった！早く帰つてこい！もう、耳タコだよ！（身も心も疲れ果てている）…疲れたから、もう寝よう。明日は早起きしてラストシーンの台詞憶えよう。歯を磨こう…うがいもしよう…目覚ましつけて…ふとんにもぐつて…

藤原

…どうしてかな？どうしてこんな役ばかりなのかな？なんでももつくんが主役なのよ。あの流れからいけば、絶対ぼくだよね…剣さんとはまるで違つた「よひよう」像を完璧なまでに構築していたというのに…なんか、ぼくつて

劇団の中で軽んじられてるよな……確かに、他の人に比べ入団して日は浅いかも知れないよ。でも、劇団におけるぼくの重要性っていうのにみんな、もつと氣付いて欲しいよね……例えば、劇団のアトリエだってぼくの。パパの持物なんだよ。パパの会社が昔使ってた倉庫をぼくが、このぼくが無理言って貸してもらってんだから……ぼくがいなきゃね、この劇団なんて流浪の民のジプシーのさまよえるオランダ娘ってわけさ……

突然、背後に三森が現れる――破れたコートを羽織り、黒眼鏡をかけている。きつと三森じゃないって設定だな、これは……

三森 ……その気持ち、痛いほどよく分かります。

藤原 げつ、聞かれてた……誰だ、お前？

三森 さあ、誰でしょう？ ただ、あなたの心の友とでも、言っておきましょうか……

藤原 うんず？

三森 そう呼ぶ輩もおりますが……

藤原 でも、それは……劇中の登場人物だよ……今は現実だよ？

三森 いかにも、現実でございます、坊ちゃん……

藤原 よかった……

三森 ……あなたは劇団になくてはならない存在であることは重々承知しております。

さて、先ほどの懸案でございました主役の件。やはり私も、あなたが主役をやるべきだと思っております。

藤原 やはり、きみもそう思う？

三森 そこで、提案でございますが。一人紹介したい人物がおりまして……

藤原 誰？

三森 この方です。

吉田が現れる。でもチンピラみたいな格好をしている。なんか知らんけど、ガム

噛んでる。

吉田 こいつかい？ チャカ欲しいゆうてけつかるのは……

藤原 チャカ？

吉田 ああ、そうや。ロシア直輸入のマジもんやで……

三森 そうです。それで、茂木を殺す……

藤原 殺すって？

三森 そうすれば、自動的に主役が転がり込んでくるというわけ。

藤原 ……やだ！ 出来るわけないじゃん！

吉田 おまえら、儂をおちよくとんのか、こら！ 買うのか、買わんのかはつきりせえ！

三森 さあ買うのです。

藤原 でも……

吉田 ほな、儂は帰らせてもらいまっさ……とんだ時間の無駄遣いやったわ。

藤原 (帰ろうとする吉田を制して)……ちよつと待つて！ いくらですか、それ？

吉田 カネはいんや。

三森 あなたが、パパにクリスマスに買ってもらった黄色のカマロ！ あれで手を打つことになってます。

藤原 あれ？ あれならいいや……どうせ乗らないから。

吉田 ほな、交渉成立でんな……(紙袋を渡す) こいつが噂のトカレフや。

藤原 (包みを解いて)……ちよつと待つてよ、これトカレフじゃないじゃん。トカレフってもつとこんな感じの……

吉田 (藤原に顔を近付け) ぼん……ちったあ、儂の顔も立てくれんか？ のお？

藤原 弾、中にはいつとるで氣付けて使つてんか……ほな帰るで……(去る)

三森 (銃を見つめ)どうしよう、これ……

藤原 決まってるでしょう。撃つんです、茂木を……

三森 でも……

小埜、安っぽいぺらぺらのドレスのようなものを着て走り込んでくる。

小埜 あんた！ なにぐずぐずしてんだい！ 殺っちまいな、あんな男。あいつは、あた

いのこと弄ぶだけ弄んどいて・・・あたいをぼろ雑巾のように捨てたのさ！ あい
つはクズなんだよ！

藤原 (拳銃を握り締めてる)…………

小埜 おや？ 奴の女が現れたようだぜ！

キャサリン大塚は練習着で柔軟運動を始める……

大塚 ……年とともにどんどん体が硬くなっていくね、まったく。

そこに現れる練習着姿の茂木。

茂木 ちわつす、あつ、キャサリン早いね……

大塚 おう、やる気丸だしって感じだろ！

他の人々も次々に現れてくる。小松・田口・木暮崎は舞台一番奥で腕組みして
る。その前方に藤原、それを取り囲むように三森・吉田・小埜……そして舞台の
前つ面に茂木、そして大塚という布陣だ。

茂木 ……明日はあんたより早く来ますよ。何たつて主役ですから……

藤原 (拳銃を握り締め、銃口を茂木に向ける)

三吉／小 ……さあ、撃て、藤原！ もっくんを撃て！

藤原 ……

三吉／小 主役のために！ あの男を撃て！

藤原 ……

松／田／木 撃て！ そうど！

三吉／小 ……さあ、撃て、藤原！

松／田／木 撃て！ そうど！

藤原、目をつぶり、引き金を引く。撃たれる茂木！ そして二発三発と撃ち
込まれる弾丸。銃弾に踊る茂木！ ……拳銃を手にしたまま、立ち尽くす藤
原。茂木は息絶えている……

大塚 よひよう！！ (駆け寄る)

小松 はい！ そこでストップ！ (全員、緊張を解く―藤原と茂木以外)……田口、

だいたいこんな感じ、よひようが撃たれるとこ……そうどが、妬みから殺すわ
けよ。三森、グッ！

木暮崎 吉田さん、グッ！ だけど、ちよつとやりすぎ……

小松 おい咲智！ お前、もつと愛憎表裏一体って言うか、なんかこう愛と憎しみが
コングロマリットした感じ出せねえかな？

小埜 あーい、分かりやんした。

小松 それから、キャサリン！ おまえさ、このシーンのときは、機織りしてるわけ

よ……この男のためにな。その演技じや機織りじゃなくて柔軟体操にしか見え
ねーんだよね……

大塚 はいはい。

小松 ひとつ抜いてはトントントン、ふたつ抜いてはトントントン……こんな感じで行こ
う！

大塚 おっけー！ ひとつ抜いてはトントントン、ふたつ抜いてはトントントン……(珍妙
な唄と踊り) こんな感じね？

小松 ベリグッ！！

加奈 (舞台袖から衣装を抱えて出てくる) キャサリン、はい、これあんたの衣装。そ

れからもつくくんのどてら、ちよつと待つてね……こら、もつくん！（茂木を揺り動かし）……もつくん、もつくん！

どうした、加奈？

……もつくん、死んでる！

なんだつて？（駆け寄るうとする）

（なんのことはなく起き上がり）はーつ。

冗談冗談……

まったく……

……でも俺、ホントに死んだかと思いましたよ。だつて、藤原君、気合が凄いから……

おい、小松！ 藤原、なんか変なんだけど……

何が変なんだ？

ちよつとこちへ……（藤原の目の前で手を振るが、藤原反応しない）

ほんとだ。どうした、藤原！……壊れたか？

（微動だにせず）ぼく、今……本当に殺した……

……ああ、そうだ、殺したんだよ、そうどがよひようをな……

違う！ そうどじゃなく、ぼくが殺した…… よひようじゃなく、もつくん殺した……

……なに言つてんだ？

だつて、三森さん、そう言つたじゃん……もつくん殺せつて……

「よひようを撃て！」つていったよ。

もつくんつて言つた！ 吉田さんも、咲智も……

（首を振る）

小松さん！ 俺、台詞間違えた？

うんにゃ。

……もつくん、ぼく別にもつくんのこと憎んじやないからね…… もつくん、殺そうとして殺したんじゃないからね……

死んでねえだろ、もつくんは……

……違うからね？……このあと生き返るんだよね？ ドラマの筋から行くと、生き返ることになるんだよね？

はいはい、そうそう。おい、誰かこのかわいそうなおぼっちゃまを介抱してくれないか？

なにこれ、指がガチガチじゃん……（退場）

小埜と加奈が駆けつけ、藤原を運んで行く。

どうしたつて言うんだ、あいつ？

日常を舞台の上に持ち込んだんじゃないの？ 役作りのために……素人だよな、ホント。

これだからトローシローはよ……俺なんか、逆に舞台を日常に持ち込んでるぜ！

それも、だめだよ！

ああいう奴じゃねえか？ 舞台の上で本気で泣いちゃつて、それで演技だと思つちやう奴……

じゃ、あたし終電早いから、今日はこれで……

ほんと遠いとこ、ごろうさん。じゃあ、明日な……

ハニ、今日のお前は最高だったぜ！

ありがとう。具体的に何処が？

いや、あの、その……ほら、おいらは具体的つてーのがイヤだよ……（大塚、木暮崎の独白の最中に「それじゃつて感じで手を上げて去る。他のみんなも「それじゃつて感じで手を上げる」なんかこうもつとオブラートに包んだような言い回しつていうか……ほらそういう言い方であるじゃないのつて、もう帰っちゃったのね？……そうだ、もつくん。（今度はもつくんに近付いて）名演技！ 感動しちゃったぜ！ 今日気分がいいから飯奢っちゃう……ささつ、早く着替

えましょ…

木暮崎、茂木をつれて奥へ引つ込む。舞台の上には小松・田口・三森・吉田、シンは続くが、長くなったんで一回切るね… てなわけで、ドゥービー・ブラザース…あつ、間違つた…To be continued…

懐柔という言葉は晦渋だ…

舞台の上には小松・田口・三森・吉田。

小松 …何なんだ、あいつは？

田口 奢り、奢りで、よくカネ続くな…

三森 きつと、また…懐柔作戦だと思えますよ…

小松 怪獣作戦？ するつてーと奴は科学特捜隊か？

吉田 食いもん使つて、てなづけようつてわけか？

三森 かくゆー、私も昨夜懐柔されましたよ…

小松 するとおまえも、「怪獣退治に使命をかけて」か？

田口 そうか！ ラーメン食いに行こうとか声かけられてたもんな…

三森 ラーメンじゃなくて、天井だつたんですけど…

田口 天井！ いいなあ…

三森 「てんや」ですよ！

吉田 やつぱり…で、どんな風に懐柔されたのよ？

小松 いいな、天井食いながら、ウルトラマンか？

吉田 徹夜で、ハイになつてるだろ、おまえ？

田口 寝た方がいいんじゃないか？

小松 やだよーん、眠くないもーん。

三森 …あの時の剣は、こんな感じでしたよ。

言いながら数歩踏み出す、三森。照明大きめのサス一本になる。手をジープンで拭いながら現れる、木暮崎。

木暮崎 わりいわりい、ちよつと、うんちしちゃった…で、頼んだ？
三森 いや、まだだけど…

木暮崎 そう・・・天井でいいよな？

三森 「てんや」来て、それ以外何があるってんだよ。シーフードドリアでもあるってーのか？・・・

木暮崎 頼んでみるか？

三森 やめろよ！ お馬鹿さんだと思われる・・・

木暮崎 いいじゃん。俺たち端からお馬鹿さんなんだから・・・ あつ、にいちちゃん！ 海

老天井と野菜天井！

三森 なんか、お前、今日変だぞ・・・

木暮崎 そうか？ いつもどおりなんだがな・・・（天井が運ばれてくる）おー来た来た、さんきゅう！・・・さあ、冷めねうちに食えよ。

三森 ちよつと・・・おれ、海老天井食っていいの？

木暮崎 当たり前じゃないか、親友！

三森 これ、海老二本も乗ってるよ？ おまえ、そんな野菜天井でいいの？ そう、じ

やあ、遠慮なく・・・（食う）

木暮崎 三森・・・野菜天井の上にや、いろんな天婦羅が乗ってるよな・・・薩摩芋天、

ゴボウ天、なす天・・・賑やかなもんだ・・・なつ？ さしづめ、いろんな役者が

同居してる劇団みてーなもんだよな・・・上手いの、下手なの、若いの、おや

じ・・・一度に、いろんな味が楽しめていいよな・・・でもよ、こんな野菜天井食

つてるときに、ふとなにか物足りなさを感じることがあるんだよな・・・天井が、

天井であることの証がこれにはさ・・・これにはねえんじやねーかって（唇を噛み

しめる）・・・そうだよ、それ！ 海老天井だよ、海老天！

三森 ...なんだ、おめー、やつぱり海老天食いてーんじやん。ちよつと、にいさん！

木暮崎 こつちに、海老天井だけ別で・・・

馬鹿！ 俺はそんなこといつてんじやねえ！ 俺たちを天井の天婦羅に喩えた
ら、なんだ？ そうだよ海老天井！ なつ、これこれ！（箸で、三森の海老天
をつつく）こつちのちつちやいのがおまえで、でかいのが俺・・・やつぱ天井は海
老だよな・・・看板みたいなものだよな・・・芝居だつて同じさ・・・看板役者

が出て初めて芝居になるんだよな・・・「こだけの話、もつくと俺ならどつち
が・・・いや、やめとこう。・・・俺が言いたかったのは、たわいもない天井の話
さ・・・（一氣にかつこんで）じゃあな、明日また。

三森 おいしい、もう行くのかよ・・・ちよつと待てよ！

木暮崎 いや、先に帰るよ。お前はゆつくり味わつて食いな。にいちちゃん、うまかつたぜ、
じゃあな、三森・・・

三森 こら、剣！（かつこんでる）

木暮崎 （帰りかけるが、はたと止まり）三森！ 俺が・・・もし、俺が、観客なら・・・

海老天の二本のつかつた天井を食いてえと思うな・・・（去る）

三森 こら、海老天食いてーなら、食ってればいいじゃんか！ おい、剣・・・

言いながら後ろに下がる、三森。照明が復帰する。

田口 歯がゆい会話だな・・・

吉田 剣らしいよ・・・

三森 ...おれ、家帰ってから考えてみたんですけど、きつと剣が言いたかったのは、「今

回の芝居に出たい」ってことじゃないかと・・・

田口 その場で分かれよ。それ以外にどういう解釈があるんだ！

三森 いや、だから・・・かき揚げ井だつてあるんだ！ とか・・・

田口 お前のボケは狙いか？ それとも天性でアブリオリか？

三森 なんすか、あぶりおりつて？

田口 ...

吉田 とにかく、それ決めんのは、小松、お前だよなつて・・・あれ、小松は？

田口 後ろで寝てる・・・（ほんとに、後ろで寝てる）

吉田 まつたく、風邪ひくぞ・・・おい、小松・・・

起きやしねえよ、吉田さん。取り敢えず毛布かけて、俺たちは帰ろう・・・三
森、毛布持つてきて掛けておいてくれないか？

三森 おつけーっ！（走って退場）

小松の安らかな寝顔を見ながら……暗転

と、間髪入れずに、明転！「夜の繁華街ってな感じ……

茂木と木暮崎、登場する。

茂木 ……剣さん、やつぱり、ラーメンでも食べますか？

木暮崎 折角の奢りなんだから、もっと豪勢にいけよ！

茂木 豪勢に！じゃあ、「てんや」いきましょ。おれ、海老天丼食っちゃおうかな……

木暮崎 それ、昨日やったから、いい……

茂木 えっ？ なんですか？

木暮崎 「てんや」で豪勢とは！ 悲しい男だね、お前は？ ……そうだ、寿司つまみに行こう！

茂木 すし？ 天罰下りますよ。

木暮崎 これだから、小劇団の人は……この辺に俺のいきつけの寿司屋があるから、寄ってこう……

茂木 いきつけの？ さすが、日暮里キッズカム・バイは言うこと違いますね……

木暮崎 だろう！ ……ああ、ここだ、ここだ。

茂木 あれ？ これはぐるぐる回ってるタイプの寿司屋ですね？

木暮崎 （当然のごとく）ああ、ぐるぐる回ってるタイプの寿司屋だ。ちわっす！

茂木 ちわっす！（真似する）

木暮崎 （座って）さあ、なんでも食え！ 遠慮はするな！

茂木 （座って）はい、なんでも食べます。遠慮はしません。

木暮崎 （茂木が皿を取るのを見て）おっ！ 初っぱなから絵皿とは豪気だね！

茂木 豪気でしょ。あれ、木暮崎さんは、タコですか……

木暮崎 やつぱり、通はタコよ……ここはこう見えても、明石の蛸つかつてんだよ……えっ！ 輸入もん！（おやじを呼び、人差し指を唇に当てる）おやじ、おやじ。

しーっ。（しわくちやの札を取り出し）あつ、これ少ないんだけどとつといて……うんうん、いいの……出来れば、勘定に入れといて……

茂木 （バクバク食ってる）やつぱり、寿司は旨いですね……

木暮崎 （あつ、おまえ、いつの間にこんな子？ しかも絵皿ばかり……）……おまえ、ペ

ース早いね……あんまりがつくと、腹壊すぞ！ はっはっは……（電光石火の

早業で財布の中身を確認し、もつくんのさらの数を目で勘定する……）……あ

つ、おやじ。すまないが……大トロとルイベにぎつてもらえるか？ そう二人

前……でなく、一人前でもいいや……

茂木 あれ？ 剣さん、あんまり進んでませんね…… 食細いんですか？

木暮崎 ……そう、おれ、食細いの。おっと、来た来た。さあ、これが大トロだ。あと、こっ

ちがルイベな、しゃけだ、しゃけ……ルイベ食ってみな……

茂木 はい。（食う）……うまいですね、これ。

木暮崎 寿司ネタの中でも新参者だが、なかなか頑張ってるって感じで、好感が持てる

よな……まるで、劇団の中でのもつくんつてところだな……

茂木 うまいもんに喩えられるなんて光栄だな……

木暮崎 よし、じゃあ、こんどはこれだ！

茂木 これが、大トロつて奴ですか！ ……うわー、いただきます。（食う）

木暮崎 どうだ？

茂木 ……これ、歯で噛まなくても、舌で、ほら……とろつとして……

木暮崎 旨いだろ？

茂木 ……言葉じゃ表せないぐらいに！

木暮崎 劇団の中じゃ誰に喩えられる？

茂木 そりゃ、剣さんです。

木暮崎 （目頭押さえて）……さすがもつくん、分かてるよな。トロは寿司の看板みた

いなものよ。んでもって、俺は看板男優だろ？（自分とトロを交互に指さして）

似てんのよ、その存在が、その立場が、トロと俺！ ……いいか、もつくん、言いたかったのはそれだけ……じゃあな、明日また。

茂木 えつ、もう行くんですか…

木暮崎 いや、先に帰るよ。カネはおいてくからよ ちゃんと計算して食いな。じゃあな。

おやじ、うまかつたぜ…

茂木 剣さん！

木暮崎 (帰りかけるが、はたと止まり) もつくん！ やっぱり…ルイベはどう頑張ったってトロにやなれねえよな…(去る)

剣さん！ (剣は戻っては来ない… うつむいて、もう一度木暮崎の名を呟く)

剣さん…

夜の街に本当の帳が下りる―暗転。

ボケのいないツツコミ

ゆつくり明転。毛布をかぶって寝ている小松と、それを覗き込んでる大塚。

大塚 朝だ、朝だーよ… 只今から美ヶ原高原美術館アモーレの鐘が九時三十分をお知らせします。ぐわらん、ぐわらん… (小松の頭をビッグベンの鐘が揺れる

がごとくに、揺り動かす)

小松 (これにや、さすがの小松もとび起きて)…でたな、怪獣！

大塚 (小松の攻撃をかわし) おしい… 怪獣じゃなくて、キャサリンだ！

小松 なんだ、お前か… 今何時だ？

大塚 九時三十分。

小松 早いね、あんたは… 朝来るのも、台詞憶えるのも。

大塚 やる気丸だしって感じだろ！

小松 (キャサリンの顔をまじまじと見つめる)

大塚 なんだよ、気持ちわりいな。顔に何か付いてるのかい？

小松 …鼻毛出てるぞ。

大塚 (結構、動揺する)

小松 嘘だよ。

大塚 質悪いね、あんた。

小松 …ひとつ、質問していいか？

大塚 …なんだよ。

小松 (遠くを見て…) お前さ…

大塚 何処見てんだよ、あんたは？

小松 お前…芝居に穴開けたことあるんだって？

大塚 えつ… (おどろくが…しれつと答える) ……うん、あるよ。

小松 …正直に言ってくれてありがとう。(頭下げる)

大塚 実は、ワンナイトシンデレラるとき… あたし、本番の一週間前に役降りちゃ

つたことがあつてさ……

小松
うちの劇団みいだな……

大塚
もつとひとかった……端っから、才能のない連中でやつてるだろ？ だから……

ある芝居の練習中、大喧嘩になっちゃつてさ。それというのも、その公演つていうのが、一週間前つていうのに、決まってるのは題名と、公演日時と場所、一ページ半にわたる粗筋だけつて有り様だったのよ……

小松
うちとそっくりじゃん！

大塚
そうかも知れない……でも、ワナシンはことは違つてた。そんな中で、責任の擦り付け合いが始まつちやつたのよ。一番最初にやり玉に上がったのは啓子だった。

小松
あのデブチンか？

大塚
け・い・こ。由里架もストレス溜つてただろうけどさ……啓子を放り出しちゃったの……彼女、押し弱いからさ……あたしもそんな時おん出りやよかつたんだけど、出来なかつた……きつと、独りぼつちになるのが恐かつたんだよね

小松
ボケのいないツツコミてーのも考えようによつちや惨めだな……

大塚
次の日から、人が変わったように練習に精を出したわ、一人ボケ・ツツコミの練習、ギャグシーンの台本一日十ページは書いてきて、由里架に見せて……でもだめだった、やればやるほどだめになつて……啓子がやめて、一週間経つたある日、あたし、啓子の家に行ったの……顔みたら元気が出るんじゃないかと思つて……そしたら、啓子のアパートはもぬけのからでさ……となりの住人に聞いたら、田舎帰つたつて……そんな時やつと分かつたんだ、自分が本当に独りぼつちになつたんだつて。んでもつてさ、ワナシン辞めたんだ、その夜に……誰も引き留めちゃくれなかつたけどさ……

小松
それが公演の一週間前……

大塚
そー、そして、公演は中止。原因は、直前に身勝手に辞めた、わたし。あーあ、なに言つてんだらうね、あたしは？……これ、ここだけの話にしといてくれよ、恥ずかしいから……もしほかの奴にいったら……

小松
三回即死か？

大塚
その通り。

小松
じゃあ、名前も一緒にばらしたら、俺、六回即死じゃん……

大塚
気をつけな、おつさん。でも、これには素敵な後日談があつてさ……このように、生きる希望を失つた大塚さんの運命をがらりと変えてしまうような事件があつたわけです。

小松
お前は「知つてるつもり」の関口さんか？

大塚
その事件つていうのは、実はとある芝居でさ……それが、私を再び演劇の世界に引きずり込んでくれたんだした！（小松が聞きたくなさそうなのを見てとり）聞けよ！……ここからがいい話なんだからさ……

小松
いい。だつて、その話までばらしたら、今度は九回即死じゃん！

大塚
分かつた。即死一回に負けてやるから聞けよ！

小松
そろそろ、お前も即死は一回で充分ということに気付けよ……

大塚
実はその芝居つていうの……

キャサリン大塚がそう言いかけた刹那……戸口に茂木が幽霊のように立つてゐるのが、小松の視界に入った。

小松
（相当びっくりして）もつくん！ どうした！

茂木
………

大塚
どうしたの、もつくん！

茂木
……小松さん、お話があるんですが……

唐突に暗転！

馬鹿は死因になりません

明転。藤原と木暮崎をのぞいた全員が舞台上にいる。

沈痛な面持ち……

脳天気に入入して来る、藤原。

藤原 ……遅れてすいませーん！ 昨日はなんかおかしくなっちゃって、ごめんなさい。

でも、その代わり何かとても大切なものをつかんだ感じがするんだ、ぼくは……

（みなが沈痛な顔をしているのに気付き）……あれっ、どうしたんですか、みんな？ そんな顔しちゃって……

項垂れている茂木。田口が重い口を開く……

田口 ……だから、それは、小松の決めることだ。

俺の心は固まつてるぜ…… 変える気なんかねえ！

藤原 （状況が飲み込めないの、三森に聞こうとする）どうしたの、ねえ？

三森 （藤原を振り払って）でもよ、落ち着いて考えて見ろよ！ どっちがいいか！

藤原 （今度は小埜に）ねえ、どうしたの？

小埜 （藤原を振り払って）……そんなの分かってるよ。でも、もっくんがんばって来た

じゃん。すごい上手くなつたじゃん！

芝居はよ！ 頑張り賞じゃねーんだ！ 結果オシリーなんだよ！

三森 ……

藤原 （今度は大塚にアタックだ！ ここに来てやっつと、労が報われる）ねえ、どったの？

大塚 ……主役、もっくんから剣さんとやらに戻そうかどうかって話。

藤原 剣さんに戻す！？ ちよつと待ってよ！ 今さらそれはないでしょう？ ねえ、

小松さん！

小松 あたしめーよ、藤原！

藤原 そうだよ、そうだよねー。

とにかく、主役はもっくんで行く。

三森 ちよつと待てよ！ 早まるなよ……多数決取ろうぜ！

小松 小学校の学級会か、ここは？ 演出の俺がそう言ってるんだ！

田口 そうだ、三森。これは小松が決めることだ！

三森 でもよ……

小松 そういうことだ……頼んだぞ、もっくん。

項垂れて、黙りこくっていた茂木が、口を開く。

茂木 ……小松さん！ ぼく……ぼく、やりません。

小松 もっくん？

茂木 だって、剣さんの方がいいに決まつてる。ぼくがやるより剣さんがやる方が百億

倍いいって、みんな分かっている癖に……

小松 んなことねえよ。あんな馬鹿……

茂木 馬鹿です。確かに馬鹿です、剣さんは……でも、舞台の上では光るもん！ 一

番輝いてるもん！ 剣さん、かつこいいもん！

後ろにいた全員、ハッと後ろを振り返る！

小松 なに、振り返ってるんだ、お前ら！

吉田 ……剣が登場するんじゃないかと思つて、身構えたんだが！（みんな、頷く……うん、うん）

茂木 ……ぼく、剣さん見て芝居始めました。ぼく、剣さん見てどんどん芝居好きに

なりました。ぼく、剣さん見たいです……この「アモーレの鐘」の舞台に剣さん立

つてるのを！……受付の椅子に座つて、劇場の薄い壁通して伝わってくる剣さ

んの怒鳴り声聞きたいです。ぼく……

小松　もういい！　やめろ！……分かったよ、分かりましたよ……主役からしてこれじゃあよ……はっはっは……やつてられつか、クソタコども！（怒って、あの小部屋に「お隠れ」になる）

田口　……いいのか、もつくん？　ほんとにいいのか？

茂木　……はい。

田口　吉田さん、小松お願いします……

吉田　分かった……（小部屋に行く）

藤原　もつくん！　ぼく、ぼくは……ほら、今日はもつくんの生き返る日だろう。ここで辞めたら、死んだままじゃなか？　だから……

三森　まだ白昼夢かよ、藤原！（首ねっこ引つ掴む）

田口　やめろ、三森。

加奈　（けっこー冷静に針仕事してたのさ）……もつくん？

茂木　加奈さん……

加奈　あんたの衣装のどてら……今、出来上がったところなんだけどな。（とつても複雑な笑顔で……）

茂木　……すいません、加奈さん……

加奈　（複雑な笑顔のまま、首を振る……）

大塚　はっはっ（力無く笑い）、ほんとに大変な劇団なこと……

田口　……すまない、キャサリン。

大塚　いえいえ……にしても、ちよいと遅すぎないかい、舞台の上で一番輝く男……

田口　そうだな……（時計を見て）げつ、もう十一時回つてるじゃんか！

三森　今日は遊びに来ない気かな？

小埜　馬鹿こじらせて死んだんじゃない？

藤原　（真顔で）馬鹿は死因になんないよ！

小埜　知つてるよ！……でもどうしたんだろう？

田口・三森・藤原・小埜、「どうしたんだろ」つてな感じで虚空を見つめる。加奈は出来上がったばかりのどてらをパンパンつてな感じで伸ばしている。もつくんは俯いたまま……明りがすとんと落ちる。

と、クロスフェードでサス一本。すごい勢いで走り込んでくる木暮崎！

木暮崎

ちようどその時、木暮崎剣は必死に走っていた！　朝起きて駅に着くまでは順調だった。が、しかし、切符を買いおうと財布をあけたらカネがない……そうだと、そうなの、そうでした……昨夜の寿司の一件で、おいらは身銭を使いきり、一文無しになったのね……走れ、剣！　走れ！　アトリエまでは推定十五キロ……立ち止まってる暇はないぜ！　やる気を、やる気を見せるんだ！（ふと、横を見て、駅舎を発見する）よし、あと駅三つ！　ゴールはもうすぐだぜ……向こう着いたら、吉田さんにカネ借りよ……

加速する木暮崎！　舞台に明りがまた点る。素に戻った登場人物達、声を揃えて「お馬鹿さん……」　必死の形相で加速し続ける木暮崎の努力の甲斐もなく、舞台は急速に暗転する。

いかした音楽が流れ始める。舞台中央にサスが一本、すとんと落ちる。茂木、満面の笑みで立っている。うれしそうだ、必要以上に……

茂木

……いろんなことがいろいろとありましたが、紆余曲折の末、こうして、劇団は元通り。剣さん主役で再出発です。本番は目と鼻の先、いやが上にも練習に熱がこもります……

木暮崎

（サスが浮び上がらせる）……どうやら、おいらも年貢の納め時つてわけか……といつても庄屋さんに届けるわけじゃねえけどな……

小松

（サスが浮び上がらせる）剣、つまんね……
つまんねはねえだろ！

木暮崎

茂木 …でも、まだ小松さんは剣さんを許していないようです。

小松 所詮、お前はそこ止まりか…

木暮崎 なんだと、もういつぱん言つて見ろ！（怒つて腕を振り回す）

茂木 二人とも、子供みたいなもんだからしやうがないんですけど…でも心配じやないです。小松さん、心の底では剣さんのこと信賴してますから…

小松 （不服だというように、首を振る）

大塚 （サスが浮び上がらせる）ひとつ抜いてはトントントン…（珍妙な唄と踊り）

茂木 客演のキャサリンさんはここにきて、ターボがかかったようです…あまりのエキセントリックさにもう誰も付いていけないって感じ…

小松 （サスが浮び上がらせる）おばちゃん、おばちゃん、その珍妙な踊り、おら達町娘にも教えてくんろ！

三・藤 （サスが浮び上がらせる）ほほう、つう、お前随分と明るくなつたもんよのう…

小松 なんだ、このおじちゃん達？ 歩道橋の下で小学生に変な悪戯する変態？

三・藤 いかにも！

茂木 …咲智さんと三森さんと藤原君はあいもかわらず、飛ばしまくっている、でも吉田さんは…

吉田 （サスが浮び上がらせる）…こいつかい？ チャカ欲しいゆうてけつかるのんは…

小松 吉田さん！ 出が違う！！

吉田 すまん。なんかぼーとしてた…

茂木 …加奈さんのせいか、まだ緊張が解けない…

加奈 （サスが大ウケしている加奈を浮び上がらせる）

茂木 だめだつて加奈さん、笑つちゃ！ 吉田さんますます緊張しちゃうよ…

小松 （サスが浮び上がらせる）…ようし、今日はここで終わろう！

照明点灯―みんな、疲れ切りましたつて感じ…

小松 明日は小屋入りで、朝早いからな。一応、田口の方から小屋入りの役割分担

の最終確認がある…

田口 （紙切れ見ながら舞台に歩み出てきて）…吉田さん、明日の朝一番で二トン

ロング、よろしく！ 三森、大道具の搬入・組み立て、もう一度確認しといてく

れ！ 藤原、小道具具な。咲智、衣装の方大丈夫だよな…キャサリンと手分けしてやつといてくれ…もつくと加奈はチケットの方と、悪いけど金勘定

の方もお願いね、今夜中に…それから、小松。おめーも今夜中に口上文書き上げといてくれ…

小松 今夜中？ もう少し余裕持つちゃだめ？

田口 だめ！…俺これから、音響機材積み込んでくるから、じゃあな…

木暮崎 ちよいと！

田口 なんだよ！

木暮崎 俺の仕事は？

田口 そうだ！ お前に重要な仕事頼もうと思つてたんだ！ 明日、遅刻せずに劇場の方に來ること…じゃあ、行つてくるな。（去る）

木暮崎 …そんだけ？（みんなに尋ねる―頷く、みんな）さあ、飲みにも行くか！ 前祝つてとこだ！

藤原 明日、朝早いすよ…

三森 さあ、早く返りましょ。

木暮崎 みんな、乗り悪いな…キャサリン、いくか？

小松 …お前主役なんだから、ちゃんと睡眠取つとけよ、主役なんだから…

木暮崎 そうか！ 主役か！ そうだよな…きちんと休んどかなきゃな…体力温存、体力温存！

三森 じゃあ、俺たち帰りますんで…

三・藤 お疲れさまでした！（帰る）

木暮崎（こら待てよ…二人を追いかけようとするが、ふと止まり）…吉田さん、借りた金。公演終わるまで待つてね…

吉田 期待しねーで待つてるよ…

木暮崎 じゃあ、グッバイ・エブリワン！…待てよ、三森！（叫びつつ、退場）

小松 さて、口上文考えるかな…（あの秘密の小部屋に消える）

小松 キヤサリン。衣装部屋行つて柳行李整理しよ…

大塚 …うん、分かった。でも、ちよつと待って、小松にちよつと話があるのよ…（小部屋に駆け込んで行く）

小埜 （大声張り上げて）じゃあ、先に行つてるね！…（舞台上の三人に、小声で）

（変だけど、いい人なんだよね、基本的に…ねえ、ほんとにキヤサリンって公演に穴あけたことあるのかな…（小首―解剖学的に何処なんだ？―を傾げつつ、退場）

金庫を持つて来る茂木。今から、加奈と一緒に、チケット整理と金勘定しようつてわけか…おや？みんなは忘れてるかも知れないけど、隅っこの方であうろうろしている男がいるぞ！

吉田 帰っちゃおーかなあ？

茂木 あつ、吉田さん

吉田 そうだもつくん、一緒にチケット整理しよう！

加奈 いいわよ。わたしともつくんで出来るから…

吉田 でも三人いた方がはかどるよね、もつくん。

加奈 いいつて、そんな時間なんてかからないわよ…ねっ？

茂木 あつ、はい。

吉田 そんな、つれないなあ…

加奈 あなた、明日朝早く、二トシロング転がさなきゃならないんですよ。帰つて寝なさい！

吉田 （俯いて、目を大きく見開いてる）

加奈 なに、俯いて、目を大きく見開いてんのよ…さあ、帰った帰った！

吉田 （寂しそうに、首を振りながらドアまで後退る…）

加奈 お前はみなしごハッチか？

吉田 違いまーす。吉田でーす。

加奈 分かつてるよ、んなことは…いいから、帰りなさい。

吉田 憶えてやがれ！外の電柱で寂しげに石蹴りしてやる！

加奈 風邪引くわよ！真つ直ぐ帰りなさい。

吉田 加奈、俺たち離ればなれになつちやつたけど…俺信じてるよ、今でも同じ星、

加奈 見づ、つて、痛づ、舌嚙んじやつた…

吉田 （笑つて）なにやつてんのよ

加奈 …剣、お前に教えてもらつた決め台詞、とちつてしまいました！（柱に頭を

加奈 激突させて）もう完全に人生うつちやりたいつて感じ…

吉田 （笑つて）さあ、帰った帰った！…本番でとちなよ！

加奈 …はーい。（寂しげに去る）

吉田 台詞三ページ飛ばすなよ！

加奈 （舞台裏から）はーい！

茂木 （笑つて）おかしな人…

加奈 加奈さん、笑いすぎですよ！吉田さん、かわいそうじゃないですか…

茂木 だつて…（まだ、笑つてやがる、この女）

加奈 そんなに、吉田さんのこと嫌いなんですか？

茂木 好きだよ…なんで？嫌いだつたらこんなに笑いはしないわよ…

加奈 まだ、好きなんですわね？

茂木 昔も今も、同じ様にね…

加奈 じゃあ、何で別れたんですか？

茂木 単刀直入に切り出すね、あんた…もつくん、恋をしたことは？

加奈 そりゃ、多少は…（ちよつと強がつてる）

茂木 同棲したことは？

……

長年一緒にいるとき、馴れ合いになつちやうんだ……知らないうちに、持たれ掛かり合つちやつて……そんなことしてるうちに、逆にわかんなくなつてきちやうんだ……馴れ合いになりすぎて、逆に全然わかんなくなつちやうんだ……相手のことも、そして自分のことすらも……私は一体なんのかつて？ 何にも見えなくなつちやつたのよ……だから、距離を置いて、自分自身を見直そうと……

加奈
それは……

ないすよ……だから、みんなそれ見つけようと、いろんな事するんじゃないですか！ 恋とか、芝居とか……

加奈
もつくん……

茂木 (コメツキバツタの様に額を床に付けて) すいませんでした。加奈さんに意見す

るなんて、四十六億年は早いすよね……。ぼく、今日どうかしてます……。 (恥
ずかしくなつて) さあ、チケット整理やんなきゃ!

加奈
もつくん……

さあ、早くしないと、夜が明けちゃいますよ……ね？

加奈の見つめる中、金庫の中から、チケツトを出し、慣れた手付きでその枚数を数え始める。大仰に声を出しながら……

勇壮な音響が響きわたる中、ホイッスルの音に混じり小松の声が聞こえる。ゆつくり明転すると、舞台の上には小松。右手にホイッスル、左手に目の丸を描いた扇子。頭には「応援団」と染め上げた鉢巻き。何だか応援してるみたいよ……

小松　　：（ホイッスル吹いて）はい、そこ！　書き割り持ってきて：　吉田さん

重いけど気をつけてね。(ホイッスル吹いて) そうだ! そこに平台! 頑張れ、頑張れ、三森、頑張れ、頑張れ、藤原。ちや、ちや、ちや・ちや、ちや、ちや・ちや、ちや、ちや! わーっ!!

大塚
(とぼとぼ現れて)……何やつてんだ、あんた？

見りや分かるだろう、応援だ！ 俺こういう現場で、役に立たないから、応援

団長任されてるんだ！（唐突にホイッスル吹いて）こら、もつくん、その一キロのスポット落とすんじゃないぞ！……見ろ、この鉢巻き！田口が買ってくれたんだ！いい奴だよな、田口って……

あんた、そりや……むちやむちや馬鹿にされてんのと違うか？

小松　なに言ってるんだ……因みにお前、楽屋の整理はすんだのか？

大塚
ああ、大体ね……ちよつと話があつてさ……

小松　　なんだ話って？　でも忙しいから、手短かに頼むぞ……

大塚（突っ込もうとするが、やめる）：…実は、もつくんのことなんだけどき。心配なんだよ…

小松 心配？　なんで？　役者下りてから、見違えるように明るくなったじゃんか……

やつぱ、負担だったんだろうな……

大塚　私が、心配なのは、その明るさなんだよ……

小松
なんで？

大塚 明るすぎるんだよ……なんか、無理して明るく振舞つてみたい……

小松　　そっかなー……（もつくんを見る）

大塚 (もつくん見て)・・・あの、明るさ見てるとき、すげー不安になって来るんだ・・・

だつて、似てるんだ、とつても・・・あたしがワナシン辞めた時にさ・・・

小松 ん？ なんつった？

大塚 ……だから！

キャサリンが繰り返そうとしたその刹那、田口が手にキャプタイヤを持って、現れる。

田口 おい、キャサリン。楽屋終わったんなら、照明手伝つてくれねーか？

大塚 分かった。でも・・・(小松の方をちらちら見る)

田口 小松か？ あいつは使えん・・・昔な、七万円もかけて作つた仕込ものの舞台装置、搬入のときに階段からおつことしてよ・・・一瞬のうちに七万円パーよ！ それ以来、奴は応援団長だ・・・さつ、時間ねーんだから、早く、こっちこっち・・・(大塚の腕を引っ張り、連れて行くとする)

大塚 ……(小松を見て) わたし言いたいことが・・・

小松 (応援してる・・・)

田口 応援団長にや、構うなつて・・・(大塚を連れ、退場)

入れ替わりに入ってくる木暮崎。両手にほか弁の包みをさげている。

木暮崎 さあ、みんな弁当買ってきたぜ！・・・ありや、みんな忙しそうだな(その時、

小松と視線がぶつかりあうー火花が飛び散る) おや？ 役立たずの演出家さんじゃないですか。

小松 これはこれは、あれだけ言われたにもかかわらず遅刻してきた上に、結局役に立たないもんだから、弁当買いに行かされた主演の木暮崎さんじゃないですか。

木暮崎 ……さつ、脳無しの手相手なんかしないで、早飯しちやおうと・・・(ほか弁を食

い始める)

小松 お腹すいたから・・・食べちゃおうかなーつと・・・(同じく、ほか弁を食い始める)

木暮崎 (小松の弁当を覗き込み)はつはー、小松先生はしゅうまい弁当ですか？ いいですな、ビンボ臭くつて・・・

小松 そう言う木暮崎さんは、ハンバーグ弁当ですか？ さすが味覚、小学生並！(腹立ったんで、立ち上がつて怒つちやうーきつと飯粒飛ぶんだろうな・・・)この

大馬鹿太郎が！ ハンバーグが小学生の味覚なら、バーガー好きのアメリカ人はみんな、胸毛はえても小学生か？

小松 やんのか、こら！ (やおら、立ち上がる)

劇団員全員、舞台上に走り込んで来てミエを切り、怒鳴る。

「いいかげんにしろ！」

松・暮 あれ、みんないたの？

他全員 いるよ！

松・暮 すみませーん！ (素直に謝る二人)

照明はクロスフェードで、中央でミエを切っていた茂木へのサスに変わる。ゆつくりと振り返り、静かに語り出す茂木。

茂木

・・・仕込はいつもの通り、小松さんと剣さん抜きで・・・いや、だからこそ、何の問題もなく終わりました。そして、いつもの照明さんと音響さん、それから働く舞台監督田口さんと、働けない演出家小松さんを中心としたきつかけ合わせが始まりました。さすが勝手知ったる専門オペレーター達です。小松さんの「音響、気持ち上！」とか「照明、もつとさ、ほげーつとした感じで点けてよー」なんていう曖昧で理解不可能の表現にも、愚痴ひとつこぼさず、的確な対応

をしています。剣さんは舞台の上から「おい、ここ俺にサス？ ……なんでないのよ！」なんて、いつもの通りぶーたれています。きつかけ合わせの次には、殺人的な舞台練習が待っていました。何度も何度も休み無しでシーンの練習を繰り返してます。みんなへとへとで、本番を前にして全員頓死するんじゃないかと思いましたが、結局は一人も死者は出ず、本番前日のゲネプロへと駒は進んできました。

舞台の上はすでに茂木だけとなっている。

本番前日、午後七時。定刻通りにゲネプロは始まりました。客席の前よりの一番いい席で、誰の邪魔もされず、それも加奈さんと二人で見ました。オープニングのライブから、ラストのライブまで、息もつかせぬけつたいな展開！ どれだけの連続！ でも一番良かったのは……あの藤原くんが剣さんを撃つところ！ 藤原君が銃を撃ち放ったとき、同時にぼくの呼吸も止まっていた。まるで、ぼくが撃たれたみたいだった……血煙の中、剣さんが弾丸に弄ばれて踊っている……そして、どさりと倒れる……（もつくんどさりと椅子の上に座り込む）……泣き崩れ、すぐるキャサリン。遠巻きに見守る人々……その人達も一人また二人と消えて行く。やがて、そのキャサリンも一歩ずつゆつくりと後退していく……舞台の上には、骸がひとつ。まるで、朽ちたサンダルが吹き溜りにおつこつてもいるような、何の面白みもない都市の風景……寂しく、汚い路地裏の他愛もない景色……その中で、剣さんがゆつくりと立ち上がる。すべての人類の憎悪と妬み、そして不幸を背負って、剣さんは歩き始める。何処か遠いところへ、僕らの知らない、ここじゃない何処かへ……かつこよかった……もう……もう、思い残すことはないんです……

そこへ藤原がひよこり現れる。

藤原　なんだ、もつくん。受付にいたんだ！ ……受付の仕事まだ残ってたの？

茂木　うん、ちよつと……藤原君、今日の演技すごかったね！

藤原　そうかな……生まれて初めて誉められたよ。

茂木　この調子で頑張つてね！

藤原　他人ごとみたいに言うなよ。もつくんだってさ……今回はだめになっちゃったけど、この次は、舞台立つんだろ！

茂木　でも、ぼくは……

藤原　なに、謙遜してんだよ。（握手して）やがては、僕らの時代がやってくるんだ……

上の年寄りどもがくたばれば、僕ら若者が二枚看板さ！

三森　（いつのまにか、背後に立っていて、藤原の首根っこ引つ掴む）何が年寄りどもが……だ！ お前らと、二つ三つしか違わねーだろ。

藤原　ああああ、すいません、すいません。

三森　もつくん、今日、もう上がりだつて……帰ろうぜ！

茂木　いいえ、あの、ぼく……

藤原　なんだか、まだ受付の仕事が……

三森　手伝おうか？

茂木　いいです。一人で出来る仕事ですから……

三森　そうか？　じゃ、俺、お先な！　行くぞ、藤原！（去ろうとする）

茂木　三森さん！ ……いい芝居でしたよ。

三森　（笑って）なんだよ急に、変な奴だな……じゃあな、また明日！

三森・藤原、去る。小松と木暮崎、現れる。

木暮崎　なにがだよ？　最高の演技じゃんか？

小松　てめえ、自分の演技に酔ってんじゃねーのか？

木暮崎　酔ってるよ。いいじゃん酔って……

小松　これだよ、このくそ馬鹿……

茂木 剣さん！

木暮崎 もつくん！

茂木 ……今日、すげーかつこよかったです。

木暮崎 ほら聞け、小松！ かつこいいんだから仕方ねーじゃん！

小松 もつくんもつくん、俺は？

茂木 小松さんもかつこよかったですよ、あのライブのときとか…

小松 ほら見ろ！ 俺だつてかつこいいつて…

木暮崎 俺とお前じゃ、かつこよさの質と量が、ウンドロの差なのよ…

小松 ウンデイツーんだよ、馬鹿！

木暮崎 よし、この先の「居酒屋ひょうたん」で勝負つけよう！

小松 のぞむところだ！

茂木 （駆け出す二人を制して）ホントにかつこよかったです。ふたりとも、ほんとに…

松・木 せんきゅう、もつくん。また明日な！（喧嘩しあいながら去る）

小松と加奈が出てくる。

小松 あれ？ もつくん。こんなとこいたんだ…

茂木 咲智さん、可愛かったですよ、ゲネプロ。

小松 おいおい、おだてても、茶ぐらいしかでんぞ…（と、言いながら喜んでいる様子）

加奈 受付の仕事、まだ残ってるの？

茂木 そうじゃないですけど… ああそうだ！ 受付の仕事の最終確認しましよ…

これが受付ノートで、これに各役者ごとの当日精算と、それから劇団扱いの前売と当日券の枚数を記入して…

加奈 分かつてるわ。

茂木 加奈さん。加奈さん、毎日来れるんですね？

加奈 ええ、約束したでしょ… 変だぞ、もつくん。

小松 分かった！ お前加奈さんに惚れてるな？ 毎日一緒に仕事できんのが楽しくてしかたないってか？

茂木 惚れてるだなんて、そんな…

小松 じゃあ代わりに私のことを好きだと言いなさい！

茂木 なんて？

小松 なんでも！

茂木 咲智さん、酔ってます？

小松 お前はとんでもない甲斐性無しだよ、まったく… さつ、行こ行こ…

加奈 ……じゃあ、さようなら。（去る）

加奈・咲智と入れ替わりに、吉田登場。

吉田 （何気ない風を装って）あれ？ 加奈こち来てなかった？

茂木 ……あつ、加奈さんならたつた今咲智さんと帰りましたけど…

吉田 咲智と… もつくん、何でそんな時、俺呼んでくれないの。んでもって、「咲智さ

ん、ぼくちよと君と話があるんだ… そうだ！ 加奈さんは、吉田さんと帰れば…」「もつくん、俺は別に…」「…積もる話もあるんだろ」って男気見せろよ… くつそー、今夜の敵は咲智かよ… （駆け出す）

吉田さん！ ギターかつこよかったです。

茂木 あんがと！ じゃあ、明日！（駆け去る）

最後に、田口とキャサリン登場。

田口 ……もつくん、お前まだ帰ってなかったのかよ。明日は昼一な。遅れんなよ…

（大塚に）じゃあ、いいかな、鍵任しちゃつて… 俺、オペと最後の打ち合わせあるから…じゃあな！（駆け出す）

茂木 田口さん！ ありがとうございます。

田口 ありがとうございます？

茂木 だから、いい芝居見せてもらって……

田口 お前に見てもらうためにやってんじゃねーよ！ 今度は、お前も役者で、もつ

といいの作ろうぜ……そんじゃ、明日！（駆け去る）

……

大塚 ……もっくん、帰らないの？

茂木 ええ……

大塚 ……どうしたんだい？

茂木 あつ、そうだ！ 忘れてた！ 小松さんにこれ渡しとかなきゃならなかった。

（封筒を取り出す）これ、小松さんに頼まれた当日精算の集計なんですけど、明日、小松さんに渡してもらえますか？ 忙しそうだったら、公演の後でもいいです。

大塚 分かった、渡しとく。……もっくん？

茂木 なんですか？

大塚 次回は一緒に舞台立とうね。

茂木 キヤサリンさんはまたやつてくれるんですね？

大塚 約束する。今回のじゃ、なんか半端すぎてさ……

茂木 半端？ 今日のゲネプロのキヤサリンさん、最高でしたよ

大塚 ありがとうございます……でも、そのキヤサリンさんはやめろ！

茂木 はい。……じゃ、戸締りして帰りますか？

大塚 あたし、楽屋の火の元見てくるから、あんた劇場の方確認しといてくれる？

走って退場する大塚。もっくん、一歩前に踏み出すと単サスに変わる。

茂木 （ゆっくりと受話器を上げる仕草）……うん、大体終わった……明日で下宿を引き払う用意は出来てるし、友達への挨拶も終わった……うん、電気も、ガスももう届けは出してあるよ。この電話だって、明日中に切れることになってるし……

小包は届いた？ ……ああ、そうか？ じゃあ明日かな？ ……そう、寝台特急で帰るから……そっち着くのは、午前中かな……いいよ、迎えに来なくて……おやじだつて仕事だろ？ うん、分かった。……じゃあ、おやすみ……（電話を切る）……ぼくは、迷ってない……決めたんだ！ 後悔なんか、しない……だつて、これは生まれて初めて自分で決めたことだから……

ゆっくりと…… ゆっくりと、暗転。

遅刻したる者、十分につきスニッカーズ一本罰金

時計が秒を刻む音が異様な大きさに響いている……

コチチチ……コチチチ……コチチチ……(ショートデイレイのデジタルエコー) ゆっくりと明転―頭を抱えている田口、フェルトペンを手にぽけーとしてる小埜、横になって鼻歌を歌っている三森、柔軟なんかして一人、気を吐く藤原、ギターの調律をしている吉田、衣装の修繕をしている加奈、そして熟睡している小松。

劇場の壁に大きな貼紙「厳守／遅刻したる者、十分につきスニッカーズ一本罰金！」の大字の下にキヤスト・スタッフの名前が連記されている。

木暮崎剣、キャサリン大塚、そして茂木公一の三人のラインにはすでに三つの正の字プラス2。

時計が秒を刻む音が止まる―柱時計(そんなもん普通あるか?)が時を告げる音! ぼおん、ぼおん、ぼおん、ぼおん。

(柱時計を見て) 四時ちょうど……開演まであと三時間。

吉田
小埜
(立上り、貼紙に向かう)スニッカーズ十八本目!

田口
咲智、もーいい。

小埜
よくないよ。こういう事はきつちりとやらないと……

田口
やめろ! (本気で怒ってやんの)

小埜
こえー……

田口
三森、奴らに電話。

三森
またかよ。十分ごとにかけてるじゃん。どうせ、いやしねえつて!

田口
電話! (本気で怒ってやんの)

三森
はいはい……(立上り、しぶしぶ電話かけに行く)

加奈
どうしたんだろうね、みんな?

藤原
いくらなんでも遅すぎますよね? まあ、剣さんはともかく……

吉田
あいつは本番三十分前っていう世界記録の保持者だからな。

小埜
あん時つて、剣さん。家でメイクして、電車の中で柔軟運動やつて、新宿の町中、走りながら発声練習したんでしょ?

藤原
それつて、ただの危ない人ですよね?

吉田
そう、よく保護されずに、劇場までたどり着いたもんだよ……

小埜
今回は記録更新かな?

吉田
いいことのように言うなよ!

藤原
でも、それ今回あり得るんじゃないですか……ほら、小松さんと朝まで飲んで

たわけだし……

田口
藤原、今なんて言った!

藤原
し、しまった! 田口さんには内緒でしたよね……

田口
藤原、その馬鹿起こせ!

藤原
はいはいはいはい、小松さん、すみません、起きてください、小松さん!

小松
(起きる)……みんな集まったあ?

田口
小松、とりあえずよだれ拭け。

小松
はあ?

田口
よだれ拭け! (本気で怒ってやんの)

小埜
あいあいあいあい……(よだれ拭く)

田口
小松、おめー、剣と朝まで飲んでたんだつて?

小松
ああ、久々腹割って飲んだつて感じた……んでもつて、俺は直接こち来たけど、

奴は家帰るつて言つてさ……(欠伸)

田口
するか? 初日前夜に、演出と主演が!

そこに戻ってくる、三森。

三森
……電話してきましたよ。結果同じ、もつくとキャサリンは電話出ず。剣は、

いつもの留守電。

小 埜 いつものつて、あの一度聞くとやる気削げちゃう、あれ？

三 森 そう俺、そのテープ、今日十回も聞いてんのよ、ここの二時間のうちに…

田 口 まだ寝てんのか？ あいつまだ寝てんのか？

小 松 俺に聞いても分かるかい？

田 口 …俺、今から剣の家行ってくるから… まだ四時だろ、だったら帰ってくるのは…

吉 田 もう四時半だぞ。

小 埜 えーっ、知らぬまに三十分も… (貼紙に走って行き、フェルトペンで記す) やった、三人とも二十個の台大突破！

田 口 (無言で貼紙に歩み寄り、それを引き剥がし、几帳面に数枚に破る)

小 埜 何すんだよ！ あたしの楽しみなんだよ… あーあ、私のスニーカーズ六十個がこんな紙切れに… うっうっうっ… (とても悲しむ)

田 口 問題はあとの二人か？ もつくんの方は加奈がいるからいいとして… (加奈に)

最悪一人でやってくれ… あとはキャサリン大塚か…

藤 原 やつぱり、TMネットワークだったのかな？

小 松 んなことはねえ！ 奴は絶対来る！

田 口 信じられつか？ このくそタコ！ (脚本拾い上げ、加奈に放る) 加奈、「つつ」の

役、最悪お前やれ！

加 奈 急にやれって言われても… それに今度はモギリが居なくなっちゃうよ。

田 口 咲智、お前、二役でやれ！

小 埜 出来るかい、あんた！

田 口 どうすりゃいいんだ？ … (混乱する田口。小埜の手から、嫌がるのも聞かず、

紙の切れ端を一枚奪い去り、小松に突き付ける) 謝罪文書け！ 最悪、みんな

で土下座だ！

小 松 田口、おまえ？

田 口 謝罪文書け！ 俺がコピー取ってくるから… (客席の方をくると振り向き、

とつてつけたような笑顔でオペレーターに呼びかける) 照明の斉藤さん、音響

の高野さん。毎度毎度、どうもすみません… もし最悪の状況になっても、お金の方はきちんと出しますから… 吉田さん、ボーナス出たよね？

うん、出たけどつて、ちよつと待て！ だめだよそりや。

いいじゃないの独り身なんだから…

よくないつて。今、中国フアンドで利殖ってるんだからさ…

なんに使う気？

結婚資金…

言うに事欠いて、この男は… はっはっは、そんなことですので、心配しないでください。

田口… とにかく落ち着いて待とうよ。まだ、だめと決まったわけじゃない…

剣の時だつて、どうにかなったじゃん… ねっ？

そうそう、本番三十分前までは、わかんないだろ。

それまでこんな調子で待てつか？ …俺もう、胃壁に二百個ぐらい、穴開き

そう…

(唐突に) あつ、電話。(全員、耳をそばだてる… やはり、遠くで電話が鳴っている)

…電話だ！

はい、今出ます！ (走って、退場)

三 森 …でも、こういう時つて、決まって客からの問い合わせだったりするんだよね。

別の出口から、舞台袖に出てくる田口。田口が受話器を取ると、照明はクロスフェードで、上と下の舞台袖に落ちる二本のサスに変わる。もう一方のサスの下には、キャサリン大塚がいる。コートに黒眼鏡、スカーフではおっかむりしている。まさか変装？ でも、どうして？

田 口 はい、池袋シアターグリーン。私は劇団ぼを・たんつ…

大塚

田口さん？

田口

キヤ、キヤサリンか？

大塚

ええ、ごめんなさい、連絡出来なかったもんだから……

田口

お前今、何処にいるんだ？

大塚

うえの……

田口

なんで、うえの？

大塚

見つけた…… やっと、見つけた……

田口

なにを？

大塚

もつくん……

田口

もつくんって…… 何言ってるんだ！

劇団員全員、電話のまわりにわらわら集まってきた。

大塚

……(堰を切ったように喋り始める)だから、昨日の夜、もつくんから小松さんについて手紙預かって、でも、変だと思って、私今日になつてそれ開けちゃって……そしたら、もつくん帰るって、くに帰りますって書いて…… 私走って、もつくん家、住所調べて走っていったら、もう、部屋の中にもなくて、大家さんが掃除して…… ついさつき田舎帰ったって…… だから、走って、上野と東京駅と飛行機も有り得ると思って浜松町を何回も往復して、やっと見つけた…… なに分けわかんねーこといつてんだ！ 開演まで二時間そこそこなんだぞ、早く帰って……

大塚

だから、もつくん、見つけた…… やっと見つけた……

田口

だからもつくんはいんだ…… お前が来なきゃ、幕上がらねえだろ！

大塚

だめ！ よくない！ もつくん、いなきや……

田口が電話に一喝しようとしたその刹那、小松が受話器を奪い取る。

小松

キヤサリンか？ 小松だ……

大塚

小松…… もつくん帰るって、なにも言わず、くに帰っちゃうって…… こんなんじゃだめだよ。小松…… 助けて…… でも、わたし一人じゃどうにもなんないよ…… もつくん、連れ戻さないと……

小松

落ち着け、キヤサリン。今何処だ？

大塚

上野駅、十三番ホーム、キオスクの電話の…… (サス消えるー退場)

小松

待つてろ。すぐ行く。(電話切る)…… 俺、今から上野駅に行つてくる。

田口

なに言ってるんだ！ (時計を指さし)開演が……

小松

田口！ もつくん、帰っちゃうんだぞ！ いいのか、勝手に帰して…… このまま、さよならはねーだろう！

田口

でも……

小松

分かっている。開演までは帰ってくる。もつくんとキヤサリン連れてな…… 加奈さん、マイク箱持つてきてくれ！

加奈

はい。(舞台裏からマイク箱を持つてきて、小松に手渡す)

小松

(マイク箱のストラップを肩にたすきに掛け)…… 帰りがけに、山の手線の中でマイクして、池袋駅からここまで走りながら発声練習してやるよ！ 剣に出来て、俺に出来ねえことはねえだろ！ じゃあ、いつてくるぜ！

三・藤

(駆け出そうとする小松を制して) 俺たちも、一緒に連れてつてください！

藤原

ぼく、約束したんだ！ 今度はもつくんといっしょに舞台立つて！

三森

だから…… 連れてつてくれ！

小松

……ついてこい……

田口

俺も行く……

小松

なにほざいてんだ！ お前は舞台監督だろ！

田口

だからだ！ お前ら、馬鹿三人だけだと、ミイラ取りが何とかなつちまうだろが…… 吉田さん、ここは任した！ 電話連絡さちんと入れる。

吉田

分かった。小松、絶対に連れ戻せ！

小松

まかせろ！……いくぞ！

駆け出す四人！・・・後ろで一人唇を噛みしめてた小埜が、やおら、舞台裏へ走り込んだかと思うと、一キロスポットを持って出てくる。

吉田 どうした、咲智？

小埜 吉田さん、私も行く・・・（軍手を着けながら）もつくん、一度も舞台立ったことがないじゃん。だからこのスポット浴びさせてやんのよ。一度スポット浴びたらもう病みつきだよ・・・だから・・・（意を決してスポット持つて駆け出す）

吉田 （追つて）咲智！・・・いつちまった。

加奈 ……奴ら絶対、もつくん連れて帰ってくるよね？

吉田 ああ。

加奈 成功するよね、この芝居・・・

吉田 絶対な！（この男も、この男なりに熱くなってるみたいよ・・・）

加奈 剣ちゃんだつて来るよね？

吉田 あたりめーだろ！ 剣はよ、芝居が呼吸みたいなんなんだ。舞台立たないと、死にまうんだよ。演じれる舞台があるなら、たとえ出掛けにうんち踏んでも、靴も履き替えずに駆けつけるような男さ。

加奈 そうだよな・・・

吉田 加奈・・・最後にもう一発、舞台に掃除機かけとくか？ なつ？

加奈 ねえ、わたし・・・

吉田 ん？

加奈 わたし・・・この前、小屋入りの前の晩に、もつくんに怒られちゃった・・・

吉田 ……もつくんつて、怒ることあるのか？

加奈 すごい剣幕だったわ・・・ 加奈さん、自分自身がわかんなくなったから、劇団辞めたんですか？ わかんなくなったから、別れたんですか？ そんなこと誰も分かりはしませんよ・・・ だから、みんなそれ見つけようとしていろんな事するんじゃないですか・・・つて。

吉田 もつくん、そんなこと言ったのか・・・

加奈 ……もつくん、見つけたのかな・・・だから！

吉田 加奈！

加奈 ……わたし、劇団やりながら、どんどんわかんなくなつていった。あなたと暮ら

してて、自分自身がどんどん見えなくなつていった・・・ いろんな事にスタンスが取れなくなつていつて・・・だから、全てのものから遠ざかろうとした。劇団からも、あなたからも・・・ 自分自身を見つめなおそうとして、仕事も辞めた、人と話すのも、好きな音楽聞くのも、笑うのもやめた・・・ でも・・・ 見つからないんだもの・・・ どんなに目を凝らしても、私が何処にも見えないんだもの・・・

吉田 ……立ち止まつて考える奴がいる、でも走りながら考える奴もいる、だから・・・ あなたはいつも走つていた・・・あの街角で、あなたは勢いよく左に曲がり、私は曲がり切れずに、立ち止まった。考えようとして立ち止まった・・・ でも、あなたはどんどん駆けていく。

吉田 俺は小松と同じで、走りながらも考える質で・・・ それにUターンするなんて器用な真似が出来ない・・・

加奈 人生、引き返すことなんか出来ないわよ・・・ 許されてるのは前進だけ。

吉田 でも、俺が、次の角を左に曲がつて、すぐの角をまた左に曲がつて、もう一回曲がれば・・・あの街角に戻るわけだろ？

加奈 あなたが戻ってきたとき、あの街角はもう「あの時の街角」じゃない・・・ わたしはそこにいない・・・ だつて、私は歩き始めることに決めたから、ゆつくりと自分の速度で・・・ たつた今決めたの・・・

吉田 何処に向かつて・・・

加奈 わからないわ・・・ ただ、あなたと同じ様に、なにかを探して歩き続ける・・・ あなたが居るこの街で・・・あなたが縦横無尽に駆けずり回っている、この街で・・・

吉田 答えはこの街にあると思うか？

加奈 ええ、きつと・・・ 私たちが信じる限り・・・

吉田 加奈？

加奈 あの時電話くれてありがとう・・・あの真夜中のガスト、あれが私の一歩目だった気がするわ・・・その時、加奈の視線と吉田の視線が触れ合った！

吉田 加奈・・・

見つめあう二人―愛の前では悪魔ですら無力だ！しかし、この馬鹿（木暮崎剣という名前らしい）だけは別なようだ・・・

唐突に馬鹿（木暮崎剣という名前らしい）登場！自分で、ファンファーレみたいの口ずさんでるぞ・・・

木暮崎 お待たせしました！木暮崎剣登場！心配かけてすまなかった、みんな。ち

よっと泥酔しちゃって・・・その上、出掛けにうんち踏んじやって、靴洗ちゃった！しかし、山の手線の中でメイクして、ここまで走りながら発声してきたから準備万端ってことだぜ！あれっ？加奈さん、他の奴らは？・・・おいおい、遅刻かよ。どういつもこいつも・・・

加奈 違うの。今、上野に行ってる。

木暮崎 うえの？

加奈 もつくんが・・・もつくんが田舎帰るって、それ引き留めにみんな・・・

木暮崎 引き留めに？（力無く笑って）ご苦労なこたぜ、まったく・・・

吉田 剣、お前なんてことを言うんだ！

木暮崎 帰りにえ奴は帰らせてやればいいだろう！

加奈 剣ちゃん・・・

木暮崎 そうじゃねーか、加奈さん。球放るのをやめたピッチャーをバットを捨てたバッターをどう応援しろって言うんだい？

吉田 応援って・・・おまえ、もつくんはチームメイトだろうが！

木暮崎 それでも、同じよ！いいか、吉田さん。外にや、客がどんどん集まってきたんだ。一時の感傷に流されてる暇はねえ！何があろうと舞台立たなきゃな

んねーのよ。加奈さん、そろそろ受付で番号札渡さなきゃいけないじゃねえのか？

加奈 （はつとして、時計を見る）もう、こんな時間？どうする、客入れの時間？

木暮崎 そのままだ！

加奈 でも、みんな帰ってこなきゃ・・・

木暮崎 奴らが帰ってくるまで、俺たちが時間繋ぎするさ。

吉田 時間繋ぎ？

木暮崎 俺の唄とあんたのギター、それで充分さ・・・

吉田 そうかな・・・

木暮崎 さあ、加奈さん。早く受付へ！おいらのファンがお待ちかねさ・・・

加奈 （吉田を見る。頷く吉田をみて、意を決して駆け去る）

木暮崎 ……はつはつは、今夜の客はラッキーだぜ！剣さんのスペシャルライブのおまけつきだ！

吉田 ……（頭抱える）

木暮崎の笑い声が響く中、舞台は急速に暗転。

十九時三分発、特急北斗星、ただしB寝台

雑踏のざわめき。東北訛りのおばちゃんの声。

ここは上野駅十三番線ホーム。コート姿の茂木が立っている。

ボストンバッグ、手には缶ビール。

茂木 ……やっぱ、寒いな、ほんと……十九時三分発、特急北斗星か…… B寝台買ったのに、高いよな、やっぱ。ポップコーンとビール買ったら、財布の中身、三十

円になっちゃった。まあ、いいか……こんだけあれば、明日、駅から家まで電話することは出来るもんな…… 向こう着いたら、就職するんだし…… こんな貧乏暮しとはおさらばだ。それも自宅通勤だよ。貯金出来るな……

背後から三森の声「たとえ世界を手に入れようとも、魂を失うのであれば、仕方ないじゃん」

茂木 (その声に驚いて、周りを見回し)……今、三森さんの声がしたような。

再び三森の声「旧約聖書、イエスの言葉より、一部改変!」

三森と藤原登場! ひっくりする茂木。

藤原 三森さんが言いたかったのは、「たとえ全ての物欲が叶えられたとしても、かわりに心を失ってしまったら何にもなんないぞ!」ってことだ。

三森 いかにも!

茂木 (やっとの思いで口を開く)み、三森さん! 藤原君! どうして……どうしてここに?

三森 もつくんよお、みんなに内緒で消えるっていうのはどうゆう了見でえ?

藤原 そうだよ。僕たち約束したじゃんか? この次は一緒に舞台立つって…… 僕た

ち未来の二枚看板だろ!

三森 今日だけは許す!

藤原 それをなんだよ! こんなやつ…… こんなのつてありかよお! (段々芝居がかつて来る)

茂木 だから……

キヤサリン大塚登場。のつけから芝居がかっている。

大塚 もう、やめな、あんた達。このくそ野郎は、今回の芝居の剣の真似してるだけなんだよ。……舞台の上には、骸ひとつ。まるで、朽ちたサンダルが吹き溜りにおつてでもいるような、何の面白みもない都市の風景…… その中で、ひっそりと男は立ち上がる。誰にも知られず、ひとりぼっちで歩き始める。何処か遠いところへ、誰も知らない、ここじゃない何処かへ…… 馬鹿じゃねえのか? 演技は舞台の上でやつとくれ!

藤原 もつくん。ぼく、舞台の上で一度もつくくん殺した…… でも、君はまだ生き返ってない…… 死んだままなんだよ…… もう一度、舞台立つてよ!

茂木 ごめん、藤原君。でも、もう決めたんだ……

大塚 現実と虚構の区別もつかねえ馬鹿なんだからさ、現実の方でもぶつ殺してやりなよ……

三森 (懷から拳銃を取り出し、藤原に渡す)マジもんのトカレフだ! 知合いの元コレ者に頼んで、お前の黄色のカマロと交換しといた……

藤原 (トカレフを構え、茂木を狙う)

三森 ……はよ、撃て! 藤原!

大塚 殺つちまいな、藤原!

藤原、ためらうが、やがて意を決したように、引き金を引く。

銃声、もんどりうって倒れる茂木!

陰から小松の声「ハイ、そこまで！」 全員、緊張を解く。
小松と田口が現れる。

小松 どうだい……いい死につぶりじゃないの？

田口 そうだな……

茂木 (上半身だけ起き上がって) 小松さんや田口さんまで、何で……

小松 まだ居るぜ。さつきからお前にスポット当たってるだろ。

茂木 (自分の服や手を見る。確かに上の方からライトが当たっている。ゆつくりと、

光の方向を見る。)

小松 咲智だ。どうしても、お前にスポット当てたかったんだと……

茂木 あんな高いところに……

小松 あいつは前世サルだ、きつと……

茂木 ……どうして？ どうして、みんな……もう、開演の時間じゃないですか。

小松 公演とお前どっちが大切だと思っんだ！

茂木 ……

小松 答は、「どっちも大切」です。

茂木 (突然床に頭すり付けて) ……すいませんでした、小松さん。黙って出てきちゃ

つて…… みんなに行ったら、引き留められるんじゃないかと思って、そしたら、

ぼく帰れなくなっちゃうから…… でも、これはぼく自身が初めて決めたことな

んです。これが、ぼくが出した結論なんです……だから！

小松 (茂木の肩に手を置き) もういい、分かった。立てよ。その床は、駅員さんが毎日

掃除してはいるが、けつこう汚いぞ。……もう引き留めたりしない。これがお前

の出した答なら、抗いようねえじゃん。

田口 小松、そろそろタイムリミットだ。

小松 そうか……

田口 俺たち開演時間が迫ってるから、最後まで見送り出来ねえけど、気付いて帰

れよ。(握手する)

三森 (笑顔で握手して)……就職決まったら、手紙くれ。元気でな……

藤原 (握手して)約束したのにな……二枚看板になろうって。

三森 やめろって……

藤原 じゃあな……

大塚 さつきはくそ野郎って言ってごめんね……あれ、小松の本だからね…… どうし

てもやれつていうんだもん。

小松 わりいわりい。

大塚 もっくん、向こう行っても頑張れよ。(握手する)

小松 (肩を叩き)そんじゃま、気付いてな…… 咲智！ 帰るぞ！ (みんな、帰ろう

とする)

茂木 小松さん！ (みな動き止まる) 皆さん、ありがとうございました。(頭を

下げる)

小松 (帰ろうとするが、東北のおばちゃん達の拍手攻撃にあう)……いやいや、東北

のおばちゃん方、大変ご迷惑おかけしました。拍手はいいって！ はいはいはい

はい、握手、握手……なに？ いいって、こんな冷凍みかん貰ってどうするって……

(結局貰う)どうもありがとう。

田口 (小松の腕を引っ張り)小松！ 早く……！

茂木が深々とお辞儀してる間に、みんな去る。入れ替わりに逆側から、小埜

が登場する。スポットを背負い、片手に缶ビールを持っている。

小埜 (お辞儀しているもっくんに近付き、ビールを渡す)はい、これ饞別…… じゃあ

な！ (と、走って退場しようとするが、不意に止まる)もっくん！

茂木 咲智さん……

小埜 (振り返らずに)あたし信じてるから…… もっくん、帰って来るって…… だから、

さよならなんて言わないよ。……ここの話、実は、私……もっくんのこと好き

だったんだ…… あーあ、とうとう言っちゃったよ、咲智さんったら……

茂木

…咲智さん、剣さんのこと好きなんだと思ってました。

小埜

あんたこの期におよんでも、そんな年頃の中坊みたいな受け答えしか出来ねえのかよ。ほんとに甲斐性無しだよ、あんたは…（自嘲的に笑って）ほら、見た目はそうじゃないけど、あたしの方が年上だろ？ だから、言い出しにくくてさ… だったら、言うなよな、最後まで… そうだろ、もっくん？

茂木

咲智さん…

小埜

もっくん、今の話、聞かなかったことにしといてくれ！ じゃあな、もっくん。また会おう！（猛烈な勢いで駆け出し、そして退場）

茂木

咲智さん！

呼ぶが、咲智は帰ってこない… 立ち尽くす、茂木。

列車が侵入してくる轟音。茂木は振り向きゆっくりタラップを登り、自分の乗車券の番号を確かめながら、客車の中へ消えて行く。

薄明りの中、同時に剣の声がラウドスピーカーから響きわたる。

「う、うん、今日はご来場下さいましてまことにありがとうございます。日頃のご愛顧に感謝致しまして、今日は特別に当劇団からあなたにプレゼント！ 嫌だと言っても聞かせてやるぜ… 木暮崎剣ライブショー！（声、裏返つてるぞ）」

舞台の上には吉田（アコースティック・ギター）、木暮崎（唸り、違ったヴォーカル）。演奏曲は、ご存じ「アモーレの鐘はもう聞こえない」！

歌の途中から、ギターのオブリだけになる。木暮崎・吉田のサスが、クロスフェードで、舞台後方の明りとなる。走り込んでくる田口、三森、藤原…

田口

…小松とキャサリン、早ーなあ！ もう芥子粒じゃん。

三森

あの二人、音速で走れるって噂だぜ！

後ろから、小埜が追い駆けてくる。照明、背負ったまま…

小埜

こらあ、待て！ おまえら…（追い付いて）これ重いから、はい、藤原君（藤原に手渡す）

藤原

はい、藤原くんって言われても… これ咲智さん持ってきたんじゃないですか？

小埜

あたしは女の子だよ… あんた一番の下っ端なんだからよ。持つのは当たり前だろうが！（なんか怒ってるぞ）

藤原

こえー

三森

咲智、おめー、なに怒ってんだよ？

小埜

うるせー、おめえの知ったことか！（なんかわかんないけど、三森をむちやむちやに殴る）

三森

なにすんだよ、このくそガキ！

田口

おめえら喧嘩してんじゃねー。あんな、もうとつくに開演時間は過ぎてんだぞ。急げ、くそつたれ！

四人、猛ダッシュして退場する。と、入れ違いに、小松と大塚が入ってくる。当然だが、走っている。

大塚

…この前、あんたに言いそびれたら？

小松

なに？

大塚

ワナシ辞めてさ、演劇なんか大嫌いになつた私を救ってくれた芝居の話！

小松

ああ…

大塚

その芝居って… あんたのやつた芝居だよ！

小松

おれの？

大塚

そう、真夏のきたねーほつたて小屋の…

小松

その話、止めねーか？

大塚

あんた、あの芝居の中でも、こんな風に走つた… たまのような汗飛び散ら

せて、走つてた…

小松
そうだったな…

大塚
そして、ラスト近く客席に向かってこう叫んだ…「立ち止まるな、走れ！」って… 何もしたくなくて、生きる希望も失つた私に向かって…「立ち止まるな、走れ！」って…

小松
そうだけ…よく憶えてねーや。

大塚
「立ち止まるな、走れ！」そう言われて…わたし、走り出すことに決めた！最初はゆっくりだったけど… いろんな嫌なこと思い出してさ… でも、諦めないって、絶対諦めないって…（大塚、苦しそうにペースダウンしていき、止まる。腹を押さえてうずくまる大塚）

小松
（大塚のまわりをジョギングしながら）どうしたキャサリン！ もうダウンか？

大塚
…そういうや、朝から何も食ってなかったんだ。

小松
そんなこともあろうかと、楽屋にホットヌードルゴールドが買い置きしてある。うまいぞ！

大塚
そうかい！ あんがと、勇気がわいてきたぜ…（立ち上がる）

小松
「立ち止まるな、走れ！」晴子！

大塚
おっけー！（走りだし、加速する）

小松
（負けないように、加速しながら）その調子で、このあとの本番もお願いするぜ…

大塚
合点よ。ただし、今度「晴子」って言ったら… いいや、言つても…

極限まで加速する二人、そして退場。

照明、クロスフェードで、木暮崎・吉田に。歌い始める木暮崎。

舞台後方に加奈が現れる。白いプラカードの様なものを掲げている。

それには走り書きでこう書かれている。

「田口からTELあり。池袋駅到着！ あと十分で楽屋入り可能！」
それを見て、吉田のギターが幾分力強くなったようだ。

加奈が、二枚目のカードを見せる。

「すまん、吉田さん。もっくんは…田舎帰った。」

それを見て、吉田のギターが一瞬止まる。

木暮崎の顔をみる吉田。木暮崎が吉田にだけ分かるように、ほんのちよつとだけ首を横に振る。また、吉田のギターが力強く響く。木暮崎がそれに答える。闇が劇場を包み始める。

まるで、客入れ音楽が終わり、これから本当の舞台が始まるかのように…

アモーレの鐘はもう聞こえない

暗転の中、スピーカーからアナウンスが告げられる。

「本日はお忙しい中、当劇場にお越しいただき、まことにありがとうございます。大変お待たせ致しましたが、只今より当劇団によります『アモーレの鐘』開演させていただきます。」

ベースギターの小粋なフレーズ。そしてバスドラムがそれに呼応する。神経に障る金属的なギターのカッティングとともに、強烈なバックサスに縁取られたライブバンドが出現する。メインタイトル「アモーレの鐘はもう聞こえない」だ！

一番の終わった辺りで、ライブの破壊的な音が不意に止まる。

ライブバンドの後ろに茂木が立っている。手に缶ビールを持ち、遠くを見ている。

茂木

「アモーレの鐘」を目覚まし代わりに、歯を磨き、顔を洗う…… ぼくはここ何年か、そうやって生きてきた。でも、これからは違う。ぼくの生まれた街ではフジテレビが放映されていないから、「アモーレの鐘」は聞けないし、たとえ民放がもうひとつ増えたとしても、そのころには、もう夜間労働者ではなくなっているだろう…… 今朝聞いたあの鐘の音がきつと人生最後の「アモーレの鐘」だろう…… アモーレの鐘はもう聞こえない……でもこれは、ぼくの決めたことだ…… 今、芝居は何処まで進んでるだろう？ ……ライブはもう終わったかな、もう剣さん登場したかな…… いつもなら、今頃ぼくはもつと硬い椅子に座って、吹きさらしの長机や、誰もいない小さなカウンターで頬杖ついて、劇場の薄い壁通して伝わってくる、剣さんや小松さんの声や観客の笑い声を背中から聞いてい

るはずだ。聞こえてくる台詞はほとんどくぐもっているし、照明の明りだつてこの外には少しも漏れてくることはない…… でも目を閉じると見えてくる、役者も観客も誰も体験出来ない、ぼくだけのドラマ…… 誰とも共有出来ない、ぼくだけの発見、ぼくだけの感動…… ほら、まるで、寝惚けた脳味噌を毎朝やさしく動かしながら覚醒させてくれる「アモーレの鐘」みたいだ！ ……でも、アモーレの鐘はもう聞こえない……

ぼくは……ぼくは本当に答えを見つけたんだろうか？

車掌

（三森が暗闇の中から）……すみません。検札なんです……

茂木

あつ。（チケットを取り出し見せる仕草）

車掌

はい。どうもすみません……

茂木

……舞台の上には、骸がひとつ。やがてゆつくりと立上り、何処か遠くへ、こじ

藤原

やない何処かへ……

藤原

でも、君はまだ生き返つてない…… 死んだままなんだよ……

木暮崎

球放るのやめたピッチャーをどう応援するてんだい……

茂木

ぼくは、逃げて来たわけじゃない……

小松

人生もボタン一個で消せりやあいいのにな……

茂木

ぼくは、間違つてなんかいないし……

小埜

お前は、とんでもない甲斐性無しだよ、まったく……

三森

いかにも現実でございます、坊っちゃん……

茂木

（車掌に）今なんて言いました？

車掌

は？ 私は何も……

茂木

（車掌に）あの……すみません……次の停車駅は？

車掌

大宮ですが……なにか？

茂木

（車掌に）いえ、なんでも……

田口

新看板男優はもつくんよ…… なあ、いいだろう、もつくん……

茂木

（車掌に）……ぼくは、見つけたんでしょうか？

車掌 は？ なんですか？

茂木 いえ、なんでも… そのチケット払い戻しは出来ますか？

車掌 あなた、一回乗ってしまつた列車の…

全員 （車掌の言葉を掻き消すぐらい強烈に）引き返すことなんか出来ないよ！

吉田 でも、その角をまた左にまがつて、もう一度左にまがつて…

茂木 だから、次の大宮で降りて…上野には帰れますよね…

車掌 そのチケットは、上野発だからね…

茂木 …ぼく、池袋に…今から池袋に…

車掌 忘れ物ですか？

茂木 ええ…

車掌 では、こちらから駅に連絡して…

茂木 それじゃあ、だめなんです… それはぼくにしか見えないんですから！ 車掌

さん、上野駅から池袋までの電車料金をお借りできますか？

車掌 だからすこし繁雑になりますが乗車券の発行駅で…

加奈 あなたが戻ってきたところで、あの街角はもう「あの時の街角」じゃないかもしれ

れないのよ…

茂木 分かつてます。だからもう一度…最初から…

大塚 「立ち止まるな、走れ！」そう、言われて…また、走り出すことに決めた。最

初はゆつくりだったけど…でも…

茂木 ぼくはまだ、何も見つけてない…でも、答えはこの街にあるんですよ…

全員 君が信じ続ける限り…

茂木 だつたら、もう少し、あと少しだけ探させてください… 池袋のあの劇場の薄

い壁から漏れるくぐもつた声の中で、あの硬い椅子の上で…そして真つ暗な舞

台の上で、たつた一条の薄明りの中で…ぼくしか聞くことの出来ないぼく自

身の「アモーレの鐘」を…もう一度、もう一度だけ…最初から！

叩きつけるようなドラムのフィル・イン、「アモーレの鐘はもう聞こえない」の演奏

が、再び炎のごとく始まる。

目も眩むような照明の中で、遠くを見つめるコート姿の茂木が一瞬真つ白な光に包まれ…そして、舞台は暗転する。

「アモーレの鐘」はもう聞こえない？

いや、そんなことはない。

君が信じ続ける限り…

「アモーレの鐘はもう聞こえない…おわり」

謝辞

この作品を書くに当たつて、本劇団座長の高橋彰規氏に様々な貴重なアドバイスを頂きました。この氏の助けなしには、到底これほどまでに暑苦しい作品を書き上げることは出来なかつたに違いありません。心から感謝いたします。

記録

初演 一九九五年一月一三日～一七日 池袋シアターグリーン

作・花田智 演出・矢作勝義 音楽・矢作勝義、成井輝光 衣装・石原冬樹 宣
伝美術・種滋比古 照明・近藤澄江 制作・演劇レーベル Bö-tanz

キャスト／

茂木公一・小山昭彦 小松和人・川上琢史 田口昌・小島大祐 三森信・すず
きこーた 藤原時起夫・滝口強 小埜咲智・鈴木サエ子 吉田吉広・花田智
キ ャサリン大塚・原麻理子 西村加奈・岡田谷華子 木暮崎剣・高橋彰規

問い合わせ先

演劇レーベル Bö-tanz

〒201-0013

東京都狛江市市元和泉2-15-15-205

<http://bo-tanz.org>

shanada@me.com